

未来をつくる
小学校の風景

社会が変化しても、変わることなく受け継いできたもの、そして、社会の変化の中で新しく生まれていくもの……日本の小学校はさまざまな輝きで豊かに彩られている。教育という「未来づくり」の場に出合うその輝きを、東京都世田谷区立給田小学校の日常に見る。



全校朝会では、6年生の鼓笛の演奏に合わせて全員整列。子どもたちは、5年生になると6年生から楽器を教えてもらう。子どもたちの間で受け継がれていく伝統だ。



先生や友だちの説明を聞いて、考える。黒板を見つめ、また考える。そして「分かった!」「出来た!」と笑顔。たくさん考えたら今度は図工室でものづくり。「よし!上手く出来たぞ!」



子どもたちは校庭での木登りが大好き。自分の身長よりも高くても平気!そして、暑い日も寒い日ももうす着で校庭を駆け回る。頭も体もたくさん汗をかき、たくさん給食を食べて、たくましく、大きく育っていく。



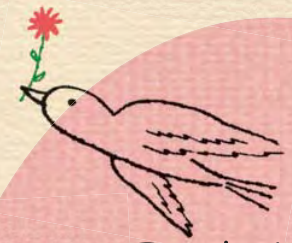
自分たちの教室を掃除するのも大切な活動。1年生のクラスまで6年生が出掛けていき、ほうきやぞうきんの使い方を手本を示しながら教えていく。帰りの会も学級全員でのあいさつで終わる。「さようなら!」の大きな声から、「明日も学校に来るのが楽しみ!」という思いが伝わってくる。



いつまでも変わらない
風景がそこにある――

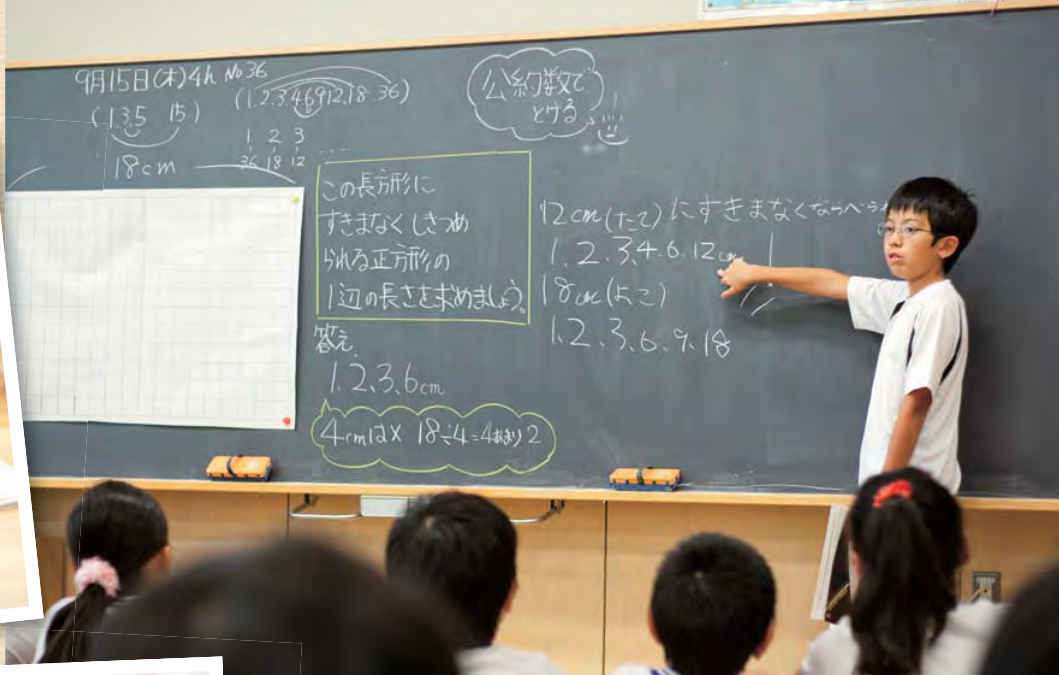
授業での学び、友だちとのかわり、給食、清掃活動……子どもの生活に広くかかわる多様な教育活動は、日本の小学校の大きな特徴であり、魅力である。小学校がこれまで担ってきた基本的な使命は、どのような時代にあっても変わらないだろう。そして学校中にあふれる子どもたちの目の輝きも。





そして、
新しい学校で
新しい未来が
つくられる

子どもを取り巻く社会は確実に、そして急激に変化している。その社会を担う子どもを育てるため、小学校はさまざまな挑戦を続ける。知識を活用したり、考えを伝えあったりして、思考力を育む授業づくり。保護者や地域に開かれ、さまざまな人とのかわりがある学校づくり。このような小学校での学びを礎に、子どもたちは未来へと羽ばたいていく。



「どんな風に考えた?」「友だちに説明して、意見を聞いてみよう!」。まずは、自分の考えを友だちに説明する。そして、ノートを見せ合いながら「ここはどう考えた?」。学び合いを通して考える力や伝え合う力を身に付けていく。



正門では毎朝近隣の住民たちが登校する子どもたちを笑顔で迎える。校内の飾り付けや掃除でも保護者や地域の人々が参加するなど、校内のあちこちに、さまざまな大人の姿が見られる。



幼稚園との交流では、未来の小学生に一生懸命踊りを教える。そして、朝のあいさつ運動では中学生になった先輩たちが参加し、「おはようございます!」と声を掛けてくれる。お互いを育て合う関係が広がっていく。



他の人の意見を聞いたら、それを基に自分の考えを見つめ直す。いろいろな考えに耳を傾けることで、思考が深まっていく。



撮影協力
東京都世田谷区立給田小学校
1961(昭和36)年開校。長年、心と体の健康づくりを重視し、子どもたちの「うす着」「はだし」は同校のシンボルとも言える。2007年度より世田谷区の地域運営学校として、「つながる給田、つよい給田」をスローガンに、保護者・地域・学校が一体となった学校づくりを進める。

校長 土橋 稔先生
児童数 827人
学級数 24学級
所在地 〒157-0064
東京都世田谷区給田 4-24-1
TEL 03-3308-5671
URL <http://school.setagaya.ed.jp/kin/>



読者の先生が選ぶ

未来に残したい 学校の一場面

どのように時代が変わっても、大切にし、伝え、残していきたい小学校の場面を
読者の先生方を選んでいただきました。

*氏名五十音順に掲載しています

地域の方と昔の遊びを体験



本校では、地域住民による「学校支援事業」を2011年度から始めました。学校教育を地域の人たちと共に行う第一歩と考えています。今の子どもは、外遊びをすることがとても少なくなりました。週末に学校の運動場を開放して、子どもたちに昔の遊びの良さを体験させようということで、「缶けり」を、子ども、教師、地域の方たちで行っているところです。

あぐい えいび
愛知県阿久比町立英比小学校
校長 石井勝巳 先生



授業研究で指導力を高める



指導力を高める上で欠かせない授業研究。2011年度、本校では20回以上行います。授業を見合い、学び合う日本の授業研究は世界からも評価されています。今後は、学び合い高め合う学習が大切です。そのためには、個を育て、かわり合わせ、それを土台に集団を高める授業が不可欠です。そうした授業を創造できる授業研究を日常化し、未来に残したいと思います。

千葉県市原市立京葉小学校
校長 鎌田正男 先生



自分自身を守る力を育む



小学校でも情報モラルを身に付ける学習指導の充実が、新学習指導要領に示されました。ネット社会の急速な発展は、子どもと無関係ではありません。ネット社会へ、主体的に、そして安全にかかわることが出来る子どもを育てることが求められています。子どもがインターネットの世界に向かう表情を目の当たりにすると、改めて情報モラル指導の重要性を強く感じます。

だいじじ
岩手県盛岡市立大慈寺小学校
副校長 金沢卓司 先生



夢膨らむ春のひととき



新年度が始まってすぐの給食を校庭で食べるのが、本校の恒例です。全児童が縦割り班になり、上級生が下級生の給食の世話をし、シートを敷いて桜の木の下で食べるので「お花見給食」と呼んでいます。春の訪れを感じながら異学年が協力し合うこの行事は、子どもの心の豊かさを培うと共に、新年度の始まりに夢と希望を膨らませる行事となっています。

かみかわちにし
栃木県宇都宮市立上河内西小学校
校長 刀川啓一 先生



伝統文化を受け継ぐ



本校では3年生の「総合的な学習の時間」で、地域について知ることをねらいとする学習の一環として、老人会の方から盆踊りを教えてもらいます。ここで踊りをマスターした子どもたちは、地域の盆踊り大会に積極的に参加し、輪の中で楽しそうに踊っています。こうした「地域の方々とののかかわり」による伝統文化の継承こそ、未来に残したい小学校の良さだと思います。

かたは
愛知県東浦町立片葩小学校
校長 鈴木俊二 先生



学校を磨き、心を磨く

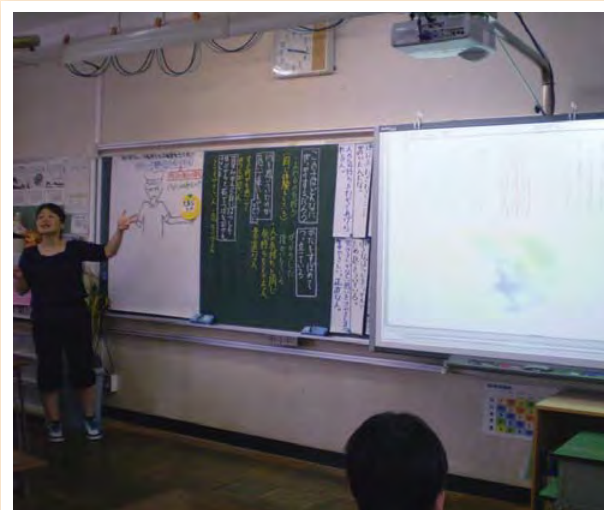


自分の担当場所を、心を込めて掃除する。自分たちの手で自分たちの学校を美しくすることで、自分の心も磨かれていくものです。学校が、教室が、子どもの豊かな人間性を育む場となるよう、授業はもちろん、何気ない日々の活動も大切に積み重ねるよう心掛けています。知徳体のバランスの取れた力を重視する日本の教育は、世界に誇れる素晴らしい教育だと思います。

すみの
愛媛県新居浜市立角野小学校
山本千明 先生



新旧の黒板を授業の核に



明治時代以来、日本の学校になくてはならないものの一つは黒板です。「板書がきちんと出来たら一人前の教師」と先輩に言われましたが、これがなかなか難しい。最近は電子黒板が導入されました。画面操作や書き込みは簡単で、画面の保存や再生も出来ます。しかし、一斉指導である限り、黒板はなくなりません。近い未来、黒板と電子黒板の併用が新しい教室の風景になるでしょう。

新潟県妙高市立新井小学校
校長 西山義則 先生



数字と写真で見る >> 日本の小学校

日本全国に約2万校ある小学校。全ての学校で学習指導要領に基づく一定水準以上の教育が保障されている上で、地域性や学校規模を生かした多様な教育活動が展開されている。

数字で見る

学校数は **約2万校**

現在、国公立合わせて2万390校の小学校がある。児童数の減少や市区町村の合併などにより統廃合が進み、学校数は減少傾向だ。

●●● 営業中の郵便局数(簡易郵便局・分室を除く)も約2万局

教員数は **約40万人**

小学校教員数は39万8223人。そのうち約6割が女性教員だ。近年は、定年退職者数が増えているため、若手教員の割合の増加が課題となっている。

●●● 岐阜市、高松市、宮崎市の人口総数とほぼ同じ

児童数は **約699万人**

児童数は、699万3000人と、過去最高だった1958(昭和33)年の1349万2000人から約半減。1学級あたりの児童数は、平均で28.1人だ。

●●● 韓国には約347万人、中国には約1億332万人の児童がいる

注) 対象年齢は、日本・韓国が6~11歳、中国が7~12歳

出典：文部科学省『平成23年度学校基本調査』、郵便局『郵便局数情報』(2011年9月)、総務省『統計でみる市区町村のすがた2011』、文部科学省『教育指標の国際比較 平成23年度版』

写真で見る

授業(教室)

単式学級では、前の黒板を向いて授業を受ける。複式学級では、黒板は前後に二つ。複数の授業が同時に行われる



北海道には音楽専科の先生が少ないため、担任の先生が教室や音楽室で音楽の授業をすることも多い(東札幌小)



廊下と教室を仕切る壁は可動式。開放感があり、他の先生も授業を見に来やすい(給田小)



5年生と6年生の複式学級。先生が片方の学年を教えている時は、もう片方の学年は自分たちで学習を進める(嘉鉄小)

給食

食器や牛乳の形は地域によってさまざま。世界各国の名物を出す給食や、子どもがメニューを考える給食もある



札幌市から全国に広まったスープカレーも給食に登場。この日は、パンかごはんかのセレクト給食(東札幌小)



東京都八丈島産のムロアジを使ったジャンボぎょうざ。地場産を使った献立の一つ(給田小)



奄美大島名物・鶏飯(けいはん)もメニューに加わる。子どもたちが大好きな一品(嘉鉄小)

体育

北の地方の学校は、冬にはスキーやスケートの授業を行う。プールが学校になく、海で水泳の授業を行う学校もある



1月中旬~2月下旬くらいまでスキー学習を行う。校庭には学習のための「スキー山」が作られる(東札幌小)



校舎の屋上に造られたプール。体育の授業だけでなく、地域のスポーツイベントにも開放されている(給田小)



校舎から海まで徒歩1分。校内にプールはなく、水泳の授業は7月まで海で行われる(嘉鉄小)

写真協力：北海道札幌市立東札幌小学校(児童数563人)、東京都世田谷区立給田小学校(児童数827人)、鹿児島県瀬戸内町立嘉鉄小学校(児童数18人)

VIEW21 小学版 創刊から30号までの歩み

2003（平成15）年10月発刊の創刊号から今号までの特集タイトルを振り返ると、その時々的小学校教育における取り組みや課題が垣間見えるようだ。特に2008（平成20）年度から3年間は、新学習指導要領全面実施に向けて年間でシリーズを組み、授業づくりを中心にさまざまな学校事例を紹介してきた。

2003（平成15）年度

- 10月号 地域で進む教育改革
- 1月号 学校評価を学校活性化にどうつなげるか

2004（平成16）年度

- 4月号 豊かな学力の確かな育成に向けて
- 10月号 教師の「授業力」向上のために
- 特別号 「学力向上」への挑戦
- 1月号 保護者の教育力を生かす学校づくり

2005（平成17）年度

- 4月号 教室を超えて生きる国語力
- 特別号 地方自治体がひらく新しい教育
- 9月号 「考える力」を引き出す授業
- 1月号 つながる幼小の「学び」

2006（平成18）年度

- 4月号 「学校力」を生み出す学校評価
- 特別号 学力調査を指導改善に生かす
- 9月号 コミュニケーションが生まれる授業づくり
- 1月号 量から質へ—これからの学びを考える

2007（平成19）年度

- 4月号 みんなで取り組む小学校英語
- 7月号 教師がつながる「授業研究」
- 9月号 つながる「保護者」と「学校」
- 1月号 データで読み解く新学習指導要領

2008（平成20）年度

- 年間特集テーマ 新学習指導要領へのアプローチ
- 春号 「言語活動」で広がる学び
- 夏号 学びが深まる「算数的活動」
- 秋号 「問題解決能力」を高める理科指導
- 冬号 「活用」から考える授業づくり

2009（平成21）年度

- 年間特集テーマ 移行措置対応のポイント
- Vol.1 担任が進める英語活動
- Vol.2 「活用」から見る算数の授業
- Vol.3 子どもが主体的に考える理科の指導
- Vol.4 言語活動を通じてつくる国語の授業

2010（平成22）年度

- 年間特集テーマ 全面実施への助走
- Vol.1 つづけたい授業研究
- Vol.2 何のため？ 各教科での言語活動
- Vol.3 「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム
- Vol.4 授業づくりと共に深める家庭学習

2011（平成23）年度

- Vol.1 現在と未来をつなぐ小学校教育
- Vol.2 思考が深まる「学び合い」

<http://benesse.jp/berd/>

★全ての記事を、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます



創刊号（左）は
タブロイド形式で
発行

3号以降、
表紙は
全国各地の
先生と子どもが
飾ってきた



小学校教育の発展を 応援いたします

株式会社ベネッセコーポレーション
教育研究部長
原 茂

『VIEW21』小学版は、2003年10月の創刊以来、全国の小学校の先生方に支えられ、今号で30号を迎えることが出来ました。心より御礼申し上げます。

知識基盤社会化やグローバル化など、社会が大きく変化する中、日本の教育はどうあるべきか、そして小学校教育はどうあるべきかを全国の先生方と一緒に考え、微力ではございますが、小学校教育の発展に少しでも貢献できるよう努力してまいります。

今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

巻頭カラー

とじ込み 未来をつくる小学校の風景

1 読者の先生が選ぶ 未来に残したい学校の一場面

3 数字と写真で見る 日本の小学校

4 『VIEW21』小学版 創刊から30号までの歩み

6 特集

未来をつくる日本の小学校

8 学校事例 ① 北海道地区 北海道札幌市立東札幌小学校
「熱中」できる授業を通して、明日の登校が待ち遠しい学校に12 学校事例 ② 東北地区 岩手県釜石市立鶴住居小学校
教育の原点を見つめながら学校を再開し、未来の町を支える人を育てる16 学校事例 ③ 関東甲信越地区 群馬県前橋市立岩神小学校
全ての教育活動で一工夫。「役立つ自分」「感謝」があふれる学校に20 学校事例 ④ 東海北陸地区 愛知県名古屋市立東桜小学校
全員が同じ土俵で行う授業研究を核に、子どもも教師も学び続ける集団に24 学校事例 ⑤ 近畿地区 京都府京都市立羽束師小学校
プロ集団としての「学校家族」を目指し、個々の教師が持ち味を生かせる学校へ28 学校事例 ⑥ 中国地区 広島県広島市立千田小学校
地域の素材を活用した教材開発をし、子どもの社会性を育む32 学校事例 ⑦ 四国地区 香川県高松市立栗林小学校
教師、保護者、地域が一体となり子どもの成長を支える36 学校事例 ⑧ 九州地区 宮崎県宮崎市立西池小学校
地域とのつながりを深め「心の基盤を西池に持つ人」を育てる

40 座談会

一斉指導、板書、校内研究 世界から見た日本の教育の強み

北海道札幌市立中の島小学校校長◎嶋田 肇

元北海道札幌市立小学校校長◎高橋承造

北海道札幌市立百合が原小学校校長◎継田昌博

44 インタビュー

新たな時代がすぐそこに

三つの基盤を維持しつつ、教師の思いを込めて授業に一工夫を

日本女子大教職教育開発センター所長・人間社会学部教授◎吉崎静夫

48 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

東日本大震災の被災者の皆さまに、心からお見舞い申し上げます。

VIEW21 編集部一同



特集



未来をつくる 日本の小学校

義務教育の第一段階に位置し、

「知・徳・体」の土台を築く小学校。

授業を柱としながら、

学校生活のあらゆる場面で子どもを育む。

これからの社会を担う大人に育てるために

求められることは何か。

小学校が、そして一人ひとりの教師が

大切にしたいことを考える。

未来に残したい
小学校の力強さ

- P.8 学校事例① 北海道地区
学校改革
- P.12 学校事例② 東北地区
教育の原点
- P.16 学校事例③ 関東甲信越地区
自己有用感の醸成
- P.20 学校事例④ 東海北陸地区
授業研究
- P.24 学校事例⑤ 近畿地区
教師の連携
- P.28 学校事例⑥ 中国地区
教材開発
- P.32 学校事例⑦ 四国地区
地域との共育
- P.36 学校事例⑧ 九州地区
心の基盤づくり

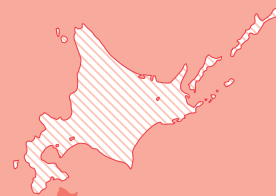
世界から見た
日本の小学校の良さ

- P.40 海外の学校への
赴任経験者による
座談会

未来の小学校に
求められること

- P.44 日本女子大
吉崎静夫教授
インタビュー





学校事例 ①

北海道 地区

北海道
札幌市立東札幌小学校

「熱中」できる授業を通して 明日の登校が 待ち遠しい学校に

どんな大人になってほしいか



- 夢をもち、その実現に向けて熱中できる人
- 自分をもち、社会がどのように変わってもくじけずに生き抜いていける人
- 自分を大切にしながら、周りの人や社会とのかかわりの視点も大切に出来る人

そのための小学校の役割



- どんな子どもも、夢や希望をもち、努力によって実現が可能なのだと感じられるようにすること
- 「当たり前なこと」を当たり前に来るようにすること
- 「あの学校に行けば大丈夫」と保護者に信頼を寄せてもらえるような学校にすること

未来に残したい 東札幌小学校の力強さ

- ◎ 「どの子どもも希望をもてる学校に」という信念に基づき、「熱中できる授業づくり」など、複数の新たな取り組みを導入。「この学校はそういう学校だから仕方がない」という雰囲気や、教師の力で変えていった
- ◎ まず校長がビジョンを提示。教頭、教務主任と共に「30～40点から始めよう」と語り掛け、取り組みを開始。実践を進める中でより良い形を教師全員で模索している



札幌市立東札幌小学校
三高純子
Miyaka Junko

札幌市立東札幌小学校
研究部長、5学年担任。「今日の自分は昨日より少しでも良くなりたい。情熱をもって、教師を続けたい」



札幌市立東札幌小学校
山元朗
Yamamoto Akira

教務主任。「人とかかわりを大切に、愛情や感謝の気持ちをバトンのようにつなげられる子どもを育てたい」



札幌市立東札幌小学校教頭
松田昭雄
Matsuda Akio

「子どもにはもちろん、学校を取り巻く保護者・地域住民、そして教職員に誠意をもって接する」



札幌市立東札幌小学校校長
中易まさき
Nakayasu Masaki

「明日は今日より必ず良くなると信じ、諦めずに小さなことにも粘り強く取り組む」

School Data

設立 1965 (昭和40) 年

校長 中易まさき先生

児童数 563人

学級数 21学級 (うち特別支援学級3)

所在地 〒003-0004

北海道札幌市白石区東札幌4条5丁目4-20

TEL 011-821-6333

URL <http://www.higashisapporo-e.sapporo-c.ed.jp/>

公開研究会 「平成26年度 開校50周年記念教育実践発表会」開催予定



校門を一步入ったら どの子ども希望をもてる学校に

札幌市立東札幌小学校の中易まさき校長は、毎朝、校門で子どもを出迎える。元気にあいさつをしてから校内に入る子どもがほとんどだが、中易校長が赴任した1年前は、少し様子が異なっていた。うつむいてボソッとあいさつをしたり、元気のない表情で登校したりする子どもが少なからずいたのだ。

同校の子どもはとても素直で、教師が真剣に向き合い、真摯に語り掛ければ心を開いてくれると、教師は口をそろえる。しかし、校区に繁華街を抱え、基本的な生活習慣や学習へ向かう姿勢が身に付いていない子どももいた。そのためか、同校に対する地域や保護者の評価の中には厳しいものもあった。教師も生徒指導などに疲れ、「この学校はそういう学校だから仕方がない」といった雰囲気も漂っていた。中易校長は次のように振り返る。

「校内に一步入ったら、そこからは学校の責任です。たとえ家庭で嫌なことがあっても、『友だちに会える』『あの先生がいる』『今日は〇〇を頑張ろう』といった前向きな気持ちで校門をくぐり、にこにここと全員の笑顔が輝く学校にしなければならぬと、強く感じました」

その思いを表した2011年度経営重点目標が「夢ふくらむ東札幌！ 笑顔かがやき、心ときめき！」だ。松田昭雄教頭は次のように説明

する。

「全ての子どもが希望をもち、自分のしたいことや夢を実現できるように、子どもも教師も『明日、学校に行くのが待ち遠しい』と思う学校にしようと、7つの視点(図)で教育活動を見つめ直しました」

検討に当たり、前年度末、中易校長は26枚にも及ぶ学校経営方針を教師に示した。それを松田教頭や教務主任の山元朗先生が各部会の教師に伝え、7つの視点にまとめ、新たな日課表に具現化した。7つの視点には、子どもの学び、心や体などの育成と共に、教師の成長や保護者・地域との連携なども含まれる。子どもを変えるには、教師自身や子どもの生活習慣などの変革が必要という考えがあるからだ。

全ての子どもが 「熱中」する授業を目指す

7つの視点に伴う教育活動をいくつか紹介する。

②学びを鍛える」の視点から、11年度に「チャレンジタイム」を始めた(P.10写真)。毎日、中休み後の10分間に漢字練習や計算練習などを行い、基礎・基本の習熟を図る。

「子どもが生き生きと授業に参加するには、基礎的・基本的な知識・技能

図 経営重点目標の具現化のための7つの視点

経営重点目標 「夢ふくらむ東札幌！ 笑顔かがやき、心ときめき！」

視点	内容	実践例
視点 1	新たな東札幌の教育の創造 新たな発想と理論に裏打ちされた教育課程の編成・実施・評価・改善	「チャレンジタイム」などを含めた日課表の改善、評価
視点 2	学びを鍛える 基礎的・基本的な知識・技能の習得と「自ら学ぶ力」の育成	「チャレンジタイム」、「ふれあいタイム」
視点 3	心を鍛える かかわりの中で、互いに思いを通わせる「しなやかな心」の育成など	清掃活動等、体験的活動の充実
視点 4	体を鍛える 折れない強い意志と、「たくましい体」の育成など	「東っ子タイム」、運動習慣づくり
視点 5	人としての力を鍛える あたたかな人間関係を育む。厳しさと温かさのある学級経営など	異学年交流の活性化、児童会活動の充実
視点 6	教師力を磨く 専門性を高める研究・研修の充実と統一的な取り組みの推進など	「熱中」をキーワードとした授業研究
視点 7	共に育てる 地域・保護者との新たな連携と教育力の活用など	学校の教育情報・教育活動の積極的な発信

*同校の資料を基に編集部で作成

の十分な定着が不可欠です。『チャレンジタイム』は、この定着と共に『自ら学ぶ力』の育成を図る取り組みです。1日10分ですが、1年間では約35時間もの学習となります(松田教頭)。「チャレンジタイム」に加えて、中易校長は、高学年でかけ算などが出来ない子どもを校長室に呼び、自ら個別指導することもある。



写真 「チャレンジタイム」に取り組む子どもたち。この時間になると、使用するドリルを机の上に出して待つようになった。学習習慣の確立にも良い効果をもたらしている

「担任だけではどうしても見取り切れないこともあります。教室の中で分からないのに黙って我慢しているだけの子どもも、一対一で教えると、簡単な問題であっても、解けるととてもうれしそうな顔をします。次第に自信を付け、学習に前向きに取り組むようになります」(中易校長)

基礎・基本の定着との両輪で、同校が目指すのは「どの子どもも熱中できる授業づくり」だ。これは「⑥教師力を磨く」の視점에当たる。研究部長の三高純子先生は、次のように話す。

「授業は学校生活の基本です。どんな子どもでも、夢中になる授業、『楽しかった』と言う授業にしたいと考えました。目指す授業像を本校の子どもの姿で考え、研究授業で語り合う中でよく出てきたのが、『熱中』という言葉でした。そこで、11年度はテーマを『熱中探しの旅』として、校内研究を進めています」

子どもが、そして教師も熱中する授業づくりのために、主に三つの要素を「探す」。一つめは、「真の熱中」といえる子どもの姿だ。学期に1回、「熱中交流会」を開き、「子どもはどのような場面で熱中したか」「熱中した時に、子どもにどのような表情や行動が見られたか」などを伝え合い、目指す子ども像を共有している。二つめは、「熱中の源」となる学習課題だ。内容や提示の方法を検討する。三つめは、どのタイミングで学び合いの場を設けるかなど、「教師のコーディネート」のあり方だ。

『熱中』という本校の子どもに即した言葉を使うことよって、一人ひとりの興味を引き付ける授業づくりについて具体的に考えられるようになりました」(三高先生)

「東っ子タイム」で 頭と心と体をすっきりと

「チャレンジタイム」は1週間で50分間となり、1コマ分、日課表の中に学年・学級が自由に使える枠が生み出された。この時間を使って、

「②学びを鍛える」の視点から、木曜日の6時間目に学年・学級担任が自由に使える「ふれあいタイム」を設けた。

「先生方が子どもと向き合う時間を増やしたいというねらいです。子どものことをよく分かっているといないと、子どもに寄り添う授業づくりも出来ません。担任が自由に内容を決めて、教師と子どもが交流する時間になっています」(松田教頭)

算数が苦手な子どもを集めて教えたり、学年集会を開いたり、学年・学級によって活動内容はさまざまだ。今後は子どもが活動内容を企画し、より自主的な活動にすることも考えている。

「東っ子タイム」は、「④体を鍛える」の視点で取り入れた。朝8時から15分間、校庭で爽やかな汗を流せる時間で、キャッチフレーズは「朝日を浴びて、頭と心と体をすっきりと」だ。山元先生はこの時間の意義を次のように説明する。

「就寝時刻が遅く、朝、学校に来てもぼんやりしている子どもが多かったのですが、『東っ子タイム』で体を動かすことで、午前中の授業でも活動的になったり、朝ごはんを食べるようになり生活習慣が整ったりする子どもが増えました」

「困った」「大変」「難しい」と 教師が言わない

11年度に新しい取り組みを次々と始めたが、

そのためにはまず、校内の雰囲気プラス思考に変える必要があったと、山元先生は話す。

「口癖のようになつていた『困った』『大変』『難しい』という言葉も、教師が言わないようにしましょうと呼び掛けました。後ろ向きの雰囲気は子どもに伝わり、『やつても無駄だ』といった気持ちにさせてしまいます。『困った』『大変』と思うところこそ、教師が向き合うべき仕事ではないか。『このままではダメだ』と思った人が声を上げ、前向きに取り組む雰囲気づくべきだと考えました」

「産みの苦しみ」もあつたと、山元先生は続ける。

「初めての取り組みはどうしても不安になります。『本当に効果があるのか』『忙しくなるのではないか』といった声がありました。しかし、私はこの取り組みによって変わる子どもの姿を心に描きました。そこで、『最初から100点ではなく、まずは30〜40点を目標して取り組んでみましょう』と校長、教頭と共に声を掛け、少しずつ工夫を加えながら前に進んできました」

「チャレンジタイム」は、導入当初、学級によって取り組む姿勢に差が見られたが、1学期の終わり頃にはどの学級でも学習に向かう姿勢が定着し、集中力が高まった。例えば、週3回、朝の活動として行う「読書タイム」でも、自然と子どもが積極的に本を選び、集中して読むようになった。授業でも集中力を発揮する子どもが増えている。また、「東っ子タイム」によって

校内に活力が出てきた。こうした子どもの変化をきっかけに、現在は教師の意識も前向きに変わってきている。三高先生は言う。

「この学校に赴任して4年が経ちますが、子どもは4年前の姿とは全く違います。学びに向かえなかつたのは子どものせいではない、子どもはいくらでも変わることが出来る。自信をもって言うことが出来ます」



中易校長が子どもに願うのは、次のようなことだ。

「今後、社会がどのようなに変わろうとも、自分らしさを忘れず、くじけずに生き抜いていく人を育てたいと思います。また、

山元先生はたびたび、子どもに「一日一生」という言葉について話をする。

「まず夢をもつことで、その実現に向けて今の自分を大切にして人生を歩んでほしいと思っています。『一日一生』は、毎日を一生懸命に生きていくという意味です。そのような学校生活の積み重ねによって、一人ひとりの良さが膨らんでいくのではないかと思います」

松田教頭は、子どもの未来を見据えて次のように話す。

「自分の特長を生かし伸ばすだけではなく、別の世界の人のつながりを大切にしてほしいです。多種多様な経験や触れ合いをもつことで、道は開けていくものです」

同校の改革は道半ばにある。地域、保護者、児童、教師によるアンケートで、マイナスイメージを含めた取り組みの総括をし、次年度の方針を立てる予定だ。加えて、これまでは中易校長が主導し、松田教頭や教務主任の山元先生を中心に、新しい取り組みを浸透させてきた。これからは、教師一人ひとりから「マイプラン」としてアイデアを募り、改革を続ける考えだ。

「どの先生にも、『こんな子どもを育てたい』という思いがあります。うれしいことに『東っ子タイム』にポイント制を取り入れてはどうかと、ある先生から提案がありました。全ての先生が学校経営にかかわりアイデアを出してもらうことによって、本校はもつともつと良くなっていくはずですよ」(中易校長)



学校事例 ②

東北地区

岩手県 釜石市立鵜住居小学校

教育の原点を見つめながら 学校を再開し、 未来の町を支える人を育てる

どんな大人になってほしいか



- 人にしてもらったことに対して、感謝の気持ちを忘れない人
- つらい経験でもきちんと受け止め、未来へと進む、たくましい心と体を持つ人
- どこにいても地域の復興を担っていける人

そのための小学校の役割



- 人や物に対する感謝の気持ちを持ち続けられるように、子どもとかかわっていくこと
- どのような状況にあっても、将来にわたって必要な力は変わらない。生き抜く力を付けるための授業をしっかりと行うこと
- 当たり前の日常を大切に、地域や保護者が寄せる信頼に応えられるような学校であり続けること

未来に残したい 鵜住居小学校の力強さ

- ◎ 地域特有の課題を重視し、防災教育を徹底して行っていた。災害時にはその訓練を生かして避難した。命の尊さ、物の大事さ、絆の大切さを改めて実感し、皆で学ぼうとしている
- ◎ 2校に分かれても自校の文化を守るという強い意志を持つ
- ◎ どのような状況でも、明るく前向きな姿勢で子どもや保護者に向き合う。目指す子ども像を共有し合い、授業を核として、将来に必要な力を子どもに付けていこうとしている



釜石市立鵜住居小学校
研究主任、1学年主任。「子ども、保護者、学校をつないでいく存在でありたい」

佐々木香理
Sasaki Kaori



釜石市立鵜住居小学校
教務主任、6学年担任。「子ども一人ひとりに目を向け、心の苦しさや喜びさを分かるように接していきたい」

千葉玲子
Chiba Reiko



釜石市立鵜住居小学校副校長
「先生方が、安心して子どもと向き合い、自分の家庭生活も営めるような環境をつくっていきたい」

真壁信義
Makabe Nobuyoshi



釜石市立鵜住居小学校校長
「教えることは学ぶこと。教師としての謙虚さを忘れずに、子どもたちと向き合っていきたい」

坂下俊彦
Sasashita Toshitiko

School Data

設立	1879(明治12)年
校長	坂下俊彦先生
児童数	272人
学級数	12学級(うち特別支援学級2)
所在地	〒026-0043 岩手県釜石市新町1-58 双葉小学校内(1~4年生)
TEL	0193-23-5122
所在地	〒026-0052 岩手県釜石市小佐野町3-5-37 小佐野小学校内(5~6年生)
TEL	0193-23-5656
E-mail	unosumai-es@edu-kamaishi.jp



*本記事の内容は、取材時(2011年8月)のものです

2校に分かれて教育活動を再開 行事を通して「鶴小の文化」を守る

三陸の沿岸部に位置する釜石市立鶴つる住居すまい小学校は、2011年3月11日の東日本大震災で校舎の3階まで浸水し、甚大な被害を受けた。11年12月に仮校舎が完成するまで、1～4年生は釜石市立双葉小学校内で、5～6年生は双葉小学校から車で5分程の釜石市立小佐野こさの小学校内で学ぶ。

8月中旬の2学期開始に当たり、坂下俊彦校長は全教職員と次のことを改めて話し合った。

「失ったものは計り知れませんが、『命の尊さ、物の大事さ、絆の大切さなど、今だからこそ学び取れるものがあるはずだ。引き続き子どもに寄り添い、教師が心一つにして、前向きな気持ちで明るく取り組む姿を示そう』と確認し合いました」

2学期の重点課題としたのは次の4点だ。

①学校行事で、学校教育目標・学校課題の具現化を図る

1学期に出来なかった修学旅行、6年生が最終学年として体験すべき学習発表会などの行事を行う。また、1学期に全校で集まったのは始業式、終業式、運動会だけだった。2学期は児童会・委員会活動を定期的に行う。

②分ける授業・出来る授業を目指す

震災があってもなくても、生涯にわたって必要となる力は変わらない。むしろ、こんな時だ

からこそ確かな学力を付けることが重要である。45分間の授業の確保に努め、1単位時間の授業のねらいを明確にし、子どもが「分かった」「出来た」と感じられるよう工夫する。そのための授業研究を行う。

③教育愛に根ざした、児童理解に基づく指導をする

子どもの心のケアを継続する。夏休み中に、多数の子どもが避難所から仮設住宅に転居するなど、家庭環境が変化した。保護者も悩みながら生活をしていることもあり、その影響を過度に受けた場合などは問題行動が懸念される。「学校を休まない」を目標に「早寝、早起き、朝ごはん」を奨励し、毎日、一人ひとりの健康状態を把握する。

④分散した学校運営をスムーズに進めるようにする

毎週水曜日と金曜日、時間を捻出し、教職員全員が双葉小学校に集まり職員集会を行う。教師のつながりを維持し、気持ちをは合わせるために、全員で顔を合わせて情報を共有することを徹底する。報告・連絡・相談を今まで以上に意識して行う。

真壁信義副校長は、学校行事の重要性を次のように話す。

「学校行事は、学校としての一体感や6年生のリーダー意識などを育むために大切な場です。この基盤があつてこそ学力も育めます。一つひとつの行事を大切に、鶴住居小学校とし

ての文化を守っていきたくて考えました」

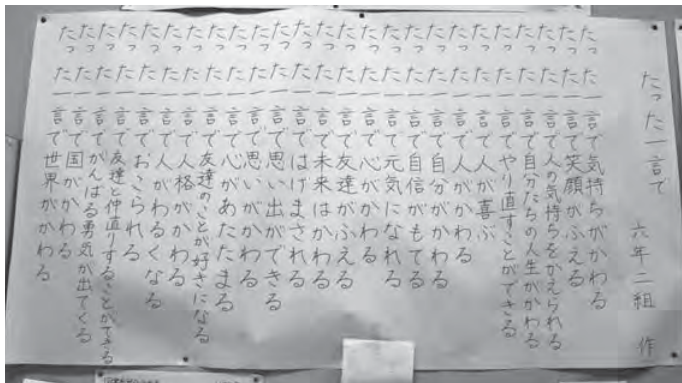
「普通の」学校生活が 子どもたちのリズムを取り戻す

教室には子どもの大きな声が響き、休み時間には外で遊ぶ姿が見られる。しかし、この日常を取り戻すまでには険しい道のりと、それを乗り越えた教師の力があつた。

震災時には、日頃の防災教育の成果により、高台へ向けて速やかに避難できた。しかし、自宅に帰っていた2人の子どもの尊い命が失われ、事務職員1人は依然として行方不明だ。また、7割弱の子どもが自宅を失い、保護者が被害に遭った子どももいた。3月11日から全ての子どもの保護者に引き渡すまでの1週間、教職員は不眠不休で子どもと共に避難所で過ごした。その後、子どもの現状把握から準備を始め、

4月26日に2校に分かれて新年度が始まった。多くの子どもは避難所や親戚宅からスクールバスで通い、そして、被災地にある学校の多くがそうであるように、同校でも約80人が転校した。

1学期の最重要課題は、「子どもの心のケア」だった。大阪市より二人の臨床心理士が1か月間派遣され、教師は子どもへの声掛けや対応の仕方を学んだ。臨床心理士による面談を、担任も同席の上、子ども一人ひとりと行ったり、「こころとからだの健康観察シート」を用いたりして、心理状態の把握に努めた。研究主任で1学年主任の佐々木香理先生は、次のように話す。



写真上 6年生の授業の様子。音楽室に机を並べて使用している
写真下 別の学級の教室には、後ろの壁にクラス全員で書いた詩が掲げられていた

「学校が再開すると、子どもは『学校に行ける』『友だちに会える』という喜びに満ちた顔で登校してきました。その笑顔が私たち教師の支えでした。ただ、『勉強よりもまずは生活』という状況下で、えんぴつもノートもなく、学校から1か月半の間、離れていたため、最初は学級集団として何か『ずれ』がありました。身に付いていた学習のルールや生活のリズムが崩れてしまっていたのです。日々、学校があることが、子どもたちの安定した生活基盤となっていることを痛感しました」

教務主任で6学年担任の千葉玲子先生も、次

学校再開後、授業は教科書と教具が全員分そろった教科から行うという状況だった。更に、スクールの関係で1時間目の開始時間に学級全員がそろわず、授業を始めるのが難しかった。

「被災したから出来ない」ではない 生き抜く力を付ける授業研究を

あることのうれしさを感じたのは教師も同じだ。「元氣な子どもに会える。当たり前だったことが実にうれしい。新任の時の気持ちを思い出した」「新1年生の机に名前を貼る喜びを感じた」。このような声が聞かれた1学期だった。

のように話す。「普通に」校舎で勉強することが、子どもの心の安定につながるのだと感じました。避難所などではストレスがたまることも多いと思います。学校は子どもにとって、友だちや教師に会える、安心できる場所だということを再認識しました」

学校が「普通に」研究計画は見直され、学級の実態から、教師の個人課題も設定し直した。佐々木先生は言う。「被災したから出来なかった」とは言えませんが、これからも子どもは生きていかなければなりません。そのため確かな学力、当たり前前の学力と社会性は付けようと思ったのです」子どもにとって「学び」は喜びでもあると、千葉先生は改めて感じたと話す。

「避難所生活の中で、宿題を出すことが適切なのかを悩みました。しかし、以前は宿題に積極的に取り組まなかった子どもも含め、全ての子どもがきちんと宿題を提出しました。子ども

図 保護者から寄せられた声

- ◎非常に落ち着いた授業風景でした。何よりも先生方が「普通」に授業を進められている姿が頼もしく感動的でした。これまでの鵜小の先生方の並々ならぬご努力とご尽力に、深く心より感謝申し上げます。(後略)(2年生保護者・5月の授業参観の感想)
- ◎久しぶりに鵜住居小学校の子どもたちを見てどうしようもなく泣きたくなくなりました。(中略)運動会を見に行ってもよかったです。子どもたちの元気をもらって私も頑張ろうと思いました。(後略)(4年生保護者・6月の運動会の感想)
- ◎今年では学校行事も出来るのかな? 6年生最後ののに……と思っていたので、運動会を「鵜住居小学校」として出来たことに校長先生をはじめ先生方に感謝します。子どもたちはすごく輝いて見えました。「鵜小」としてやりたいと息子も言っていたので、実現できてよかったです。全体練習も数えるくらいしかしていませんと聞きましたが、それぞれが自分の役割をこなし、上の子が下の子の面倒を見て、子どもたちの成長を見ることが出来たのでよかったです。忘れることの出来ない運動会になりました。(6年生保護者・6月の運動会の感想)

*同校の学校だよりから一部抜粋

狭しと貼られている。「今、子どもたちはようやく、自分に起きた出来事を振り返れるようになってきました。高学年の中には、震災の時のことを作文に書く子どもも出てきました。そこには、周りの人への感謝の気持ちがつづられていました。そうした気持ちをつづらなくても忘れないように、子どもたちとかかわっていくことが、私たちの役目だと思います」(真壁副校長)



学校再開に当たり、教科書や文房具、ランドセル、体操服、問題集など多くの学用品が各地から届いた。廊下には、全国の小学校、海外の学校から送られた励ましのメッセージが所

「低学年の子どもは何が起きたのか理解できていない段階のようです。時間が経過し、自分が経験したことを認識できるようになった時にしっかりと受け止められる心と体のたくましさ育てていきたいと思っています」(佐々木先生)

鵜住居は、地域で子どもを見守るとい文化のある町だ。新しい街づくりも小・中学校を中心に言う予定だという。

「鵜住居には以前の天津波の石碑があり、『総合的な学習の時間』で昔の災害の学習をしました。今回の震災後、ある子どもが『今度は自分たちが津波を語り継ぐんだね』と言いました。10年後、20年後、町を支えていくのはこの子どもたちです。たとえこの町に住んでいなくても、自分の体験を後世に伝え、マイナスをプラスに変えられるような人を育てていきたいと思っています」(千葉先生)

坂下校長は改めて今後の決意をこう語った。「一人ではなかなか出来ないことも、仲間が励ましてくれる、協力してくれる、困った時に支えてくれる。子どもも教師も、それを感じられるのが学校です。そうした当たり前のことが、どんなに素晴らしく、どれほど重要であるかを、私たちは思い返すことが出来ました。毎日、元気な子どもに会える。『おはようございます』と、みんなですわってあいさつが出来る。今まで何も感じていなかったことが、実にうれしく感じられます。このような教育の原点から、再び鵜住居小学校をつくっていききたいと思っています」

は『学びたい』という意欲を持っているのです。その意欲に添えていくためにも、授業研究は重要だと思っています」

子どもと先生の姿に 「忘れられない運動会になった」

子どもが毎日通学するという「当たり前」の繰り返しは、保護者にとっても安定した時間をもたらしている。

「『学校が始まってよかった』『授業をしてくれてありがとう』という声がたくさん寄せられました。朝、子どもを学校に送り出す。夕方、子どもが学校から帰ってくる。子どもが安定し

た生活を送ることで、保護者自身も日常生活を取り戻しているようです」(真壁副校長)

家庭の状況は子どもに大きな影響を与える。そのため、同校は保護者の不安を払拭することも重視し、5月には授業参観、6月には運動会、7月には保護者面談と、保護者が月に1回は学校を訪れる機会を設けた。教師の前向きな姿を見せると共に、学校の方針や今後の対応も伝えられている。学校へ寄せられた保護者の声からは、同校への深い信頼が感じられる(図)。



学校事例 ③

関東甲信越 地区

群馬県 前橋市立岩神小学校

全ての教育活動で「工夫 「役立つ自分」 「感謝」があふれる学校に

どんな大人になってほしいか



- 自分たちが生きていけるのは当たり前のことではなく、この地域や周囲の人々がいるからだと考え、人と人とのつながりを大切にし、感謝の気持ちを持てる人
- 理想や夢を諦めない人

そのための小学校の役割



- 周囲への感謝の気持ちを育むこと
- この地域で育ってよかった、この地域があるから生きていける、という基盤を感じられるようにすること
- 自分ができることを見つけて、自己有用感を持ち、臆することなく実践する姿勢を育むこと

未来に残したい 岩神小学校の力強さ

- ◎ 持てる力を自ら発揮しようとしめない子どもたちの状況の改善には、子どもが自己有用感を高める場を大人が意図的につくる必要があると考え、全ての教育活動で子どもが「役立つ自分」を感じられるような指導を行っている
- ◎ 学校内にとどまらず、保護者やPTAなどとも、学校の思いや取り組みを共有。学校を、保護者や地域全体と、「ありがとう」と伝え合い、気持ちを交流し合う場としている



前橋市立岩神小学校
山口良枝 Yamaguchi Yoshie

研修主任、1学年主任。「自分を大事にすると共に、周囲の人も大事にする子どもを育てたい」



前橋市立岩神小学校
小島映子 Kojima Eiko

教務主任。「人と人とのつながりを大切にしながら、子どもたちに思いやりの心を育てていきたい」



前橋市立岩神小学校教頭
飯野隆宏 Iino Takahiro

「子どもも教職員も保護者も地域の方も、皆が『行きたい』『協力したい』と心から思う学校を創造したい」



前橋市立岩神小学校校長
塩崎政江 Shozaki Masae

「『どうせやるなら楽しくやろう！』が合い言葉。分かりやすい言葉で学校づくりをしていきたい」

School Data

設立	1953(昭和28)年
校長	塩崎政江先生
児童数	404人
学級数	16学級(うち特別支援学級2)
所在地	〒371-0035 群馬県前橋市岩神町4-4-1
TEL	027-231-6162
URL	http://menet.ed.jp/iwagami-es/
公開研究会	2011年11月8日(火)



「役立つ自分」を感じて 積極的に力を発揮してほしい

前橋市立岩神小学校は、前橋市の中心部にほど近い住宅街に位置する。子どもは総じて活発だが、自己有用感の低さが課題だったと塩崎政江校長は話す。

「3年前に本校へ赴任した時、力はあるのに出し切れていない、あるいは自分から発揮しようとしていない子どもが多いと感じました。しかし、それは子どものせいではなく、むしろ子どもが自信を深めたり、自己有用感を高めたりする場を十分に用意できていない大人に責任があるのではないかと考えました。今の社会では、家族や学校の一員として、子どもが試行錯誤しながら力を発揮する場を、大人が意図的につくっていく必要があると思います」

飯野隆宏教頭も子どもの様子をこう話す。

「失敗を恐れて積極的に挑戦しなかったり、勇気を出して挑戦しても周囲に認められないと必要以上に落ち込んでしまったりする子どもが目につきました」

こうした状況を踏まえ、同校は2010年度から「役立つ自分」を目指して取り組む児童の育成」を研究主題に取り組みを進めている。研修主任の山口良枝先生は次のように説明する。

「自分が大切な存在だと感じられなければ、自分を出し切ることは出来ません。いろいろな活動を通じて、子どもが人のために『役立つ』

経験をすることで、自己有用感が高まり、自信が付きやすくなります。その結果、物事に積極的に取り組むようになるのではないかと考えました。このようになれば、自分も、家族や地域、友だちなど、周囲の人に支えられていることに気付き、人の大切さやありがたさを感じられると思うのです」

学校づくりの方針は「みんなが楽しい岩神小」であり、次のような思いが込められている。

「本校の目指す『楽しさ』は、『人の役に立っているという楽しさ』です。人にありがとうと言いたい、人からありがとうと言われたい、そんな子どもを育みたいと思います」（塩崎校長）

小さな成長を見逃さず 子どもに伝える

同校では、教育活動のあらゆる場面で「役立つ自分」が意識されている。

普段の授業では、「役立つ自分」「みんなのかけ」という思いが土台となっている。子どもが間違えて発言しても、教師は「それは違うよ」とは言わずに、「あなたが発言してくれたから、みんなが考えるきっかけが生まれた」と授業を進める。教師の言葉が少し違うだけで、「発言してくれてありがとう」という気持ちを自然に持て、授業中の発言にも積極的になれる。

「授業でも、『出来た』『うれしい』『伝えたい』という気持ちがあれば、子どもは学びに向かいません。教師が一方的に『良い授業』を考え

てつくり込むのではなく、子どもがどう受け止めているかをしっかり見取り、授業づくりを進めることが大切だと考えています」（塩崎校長）

高学年においては、家庭科を中心に取り組みを進めている。教務主任の小島映子先生は次のように語る。

「家庭科は、学びを家庭生活や家族のために生かすのに最適な教科です。5年生から6年生にかけて、調理や裁縫など自分の出来ることを増やし、それを家族、家庭生活に生かすことによつて役立ちを感じる場面をつくる事が出来ます。家族の役に立ってうれしいと感じること、『またやろう』という意欲が生まれるのです」

授業以外の場面では、感謝の心と役立ち感、自分の行為が喜ばれることのうれしさを感じられるように、子どもへの働き掛けを工夫する。

「なかよしタイム」を例に見てみよう。これは、1年生と6年生、2年生と4年生、3年生と5年生という組み合わせで、月1回、朝の時間にドッジボールなどをして一緒に遊ぶ異学年交流の時間だ。上級生と下級生がペアとなり、1年間、活動を共にする。すると、普段の休み時間でも、6年生が1年生の教室に行き、一緒に遊ぶようになるという。こうした光景は以前から日常的に見られたが、「役立つ自分」をテーマに研究を始めてから変わったのは、教師の子どもへの声掛けだ。

「かつて、下級生には、上級生に来てもらうことを当たり前だと受け止めている面が見られ

ました。しかし、例えば、教師が1年生に『6年生が来てくれてよかったね』などと意図的に声を掛け続けたことで、『お兄ちゃん、お姉ちゃんがわざわざ来てくれる』と意識し、感謝するようになりました。一方、上級生に目を向けると、同年年の友だちだけで活動する場面ではあまり意欲的でない子どもが、下級生と活動する時にはリードする姿を見せる場合もあります。教師はそうした小さな変化を見逃さず、褒めることを大切にしています」（山口先生）

毎年6月頃に5～6年生が行うプール清掃でも、11年度は一工夫した。掃除の様子を撮影し、全校児童の前で紹介したのだ。それを見た1～4年生は自然とその場で感謝を伝えた。5～6年生はうれしそうなお表情を見せたという。

小島先生は、少し気付きを促すだけで子どもたちの意識は大きく変わると話す。

「プールがどのようにしてきれいになったのかを伝えなければ、下級生には分かりません。5～6年生も下級生に感謝され、より一層自分が役に立ったと感じていました」

全校児童が地域に出て掃除をする「公道清掃」では、学校とは違う気付きを促せる場面もある。11年6月に6年生が公園を掃除しに行ったところ、ごみあまり落ちていなかった。2日前に地域の人たちが清掃したからだった。

「ただごみを拾えばよいのではなく、普段、公園がきれいなのは地域の人々が掃除をしてく

れているからだ、子どもが気付くような指導が大切です。そうすれば、子どもにも地域のために頑張ろうという意識が芽生えます」（小島先生）

1年生は安全上の理由から校庭の石拾いを担当。初めて「役立つ喜び」を感じる機会でもあった。

「子どもたちと『この石を拾ったら、みんなが転ぶ


にくくなるね』と言いなながら作業をしました。入学してから上級生にしてみらっただけで自分たちが役立てる、その喜びが活動への意欲の源となっていました」（山口先生）

入学後2か月でこのように考える1年生が育つ背景には、「上級生にこんないろいろなしてもらったね。今日はみんながお返しできるね」と語り掛けている教師の指導がある。

「役立つ自分」の取り組みのポイントを、塩崎校長は次のように話す。

「まず、子どもが力を発揮できる環境をつくること。そして、教師が『家族や友だち、地域の人々、いろいろな人がみんなのために頑張っているよ』と伝えることです。『みんなが自分のためにしてくれている』と気付けば、『自分もその人たちのために頑張ろう』と思います。

図 プレゼント作りのワークシート

家庭科で学習したことを生かして家族に感謝の気持ちを伝えよう	
布を使って作成し、プレゼントしよう	
だれ 母	どんなもの ハンカチ
をプレゼントしたいな	
プレゼントしたいわけ・・・ 母の仕事帰りに行くときとかが、 おきにいりに入ってほしいなと思って かいた母の言葉が思い出で、 子がまるといいと思ってるから	
出来上がり図 	このプレゼントを使ってもらって どんな気持ちになってもらいたいですか。 便利に使えるように たなと読んでみる 小さいです

他にも、プレゼントをもらった保護者の気持ちを書いてもらうワークシートも作成。親子の気持ちを交流できる
*同校の資料をそのまま掲載

「ありがとう」の気持ちを 交流させるきっかけをつくる

そして、頑張っている姿をしっかりと見取り、褒めることです。その際、担任以外の先生から褒められるのはうれしいものです。学級を超えて子どもをよく見ることが重要だと思えます」

「役立つ自分」への取り組みでは、家庭科や学校行事、地域活動など、6年間の流れが系統立てて整理され、模造紙で校内に掲示されている。感謝の気持ちを自由に書く「ありがとう短冊」も、校長室の前に所狭しと貼られている。

「校内に掲示することで、1～6年生の取り組みがどう結び付いているのか、根底にはどんな思いがあるのか、教師はもちろん、子どもや保護者に共有しやすくなります」（小島先生）

取り組みの総まとめといえる「感謝の気持ちを伝えよう」の活動の一つは、6年生の2学期後半に家庭科で行う家族へのプレゼント作りだ。小島先生が作成したワークシート(図)は、

「だれにどんなものをプレゼントしたいか、それはなぜか」「プレゼントでどんな気持ちになってもらいたいか」などの項目により、感謝の気持ちを伝えられるようになっていく。教師は「この子が家族に対してこんな思いを持っているのか」と、普段とは違う一面を発見するという。

「親も子も、日常で改まって感謝の気持ちを伝える機会は少ないと思います。『してもらってうれしい』『してよかった』という気持ちを交流させるきっかけを学校がつくれたらと思いい、ワークシートも考えました」(小島先生)

プレゼント作りの授業には学習支援ボランティアが入る。多くは児童の母親だ。

「ボランティアの皆さんも、楽しんで授業に参加しています。子どもの役に立つ喜びがあるからだと思います」(塩崎校長)

役立つ喜びと感謝の気持ちの輪は、PTA活動にも広がっている。PTA会報の特集として『役立つ自分』をめざして」が生まれ、PTA主催「親子清掃ボランティア」(年2回)の参加者は例年以上に多かった。保護者からは「子どもが毎日通う学校をきれいに出来てよかった」という声が寄せられた。感謝の言葉を伝える機会が格段に増え、学校全体に「役立つこととの素晴らしさ、うれしさ」が広がりつつある。



育てたい大人像と
そのための小学校の役割
周りへの感謝を忘れず
夢を諦めない大人に

子どもへの思いを、塩崎校長は次のように語る。

「今は、比較的、何でも手に入る豊かな時代です。しかし、10年後、20年後の社会は、むしろ『豊かさ』は当たり前ではないと感じるようになっていくのか。だからこそ、今自分がいるのは当たり前ではなく、この地域や周囲の人々がいるから生きていけると考え、人と人とのつながりを大切にすると、感謝の気持ちを持つ人になってほしいと思います。本格的な思春期に入る前の小学校時代に、周囲への感謝の気持ちや、この地域で育ってよかったという基盤を感じられることが重要だと思っています。この基盤があれば、世界中どこへ行っても自信を持って生きていけると思うのです」

飯野教頭も言葉を続ける。「子どもには、理想や夢を諦めない大人になってほしいと思います。そのために、自分が出来ることを見つけて臆することなく実践する姿勢を育みながら、世界に目を向けて将来の夢を設計し、それを語ったり図や絵で表現したりできる教育課程を考えられればと思います」

同校の職員室の机には、塩崎校長が書いたメモがよく置かれている。「今日、Aくんがこんな良いことをしていました」といった内容だ。「私が教室で『今日、校長先生が褒めていた子がこのクラスにいます』と伝えると、子どもたちは大喜びします。『1年1組はこうだね』とおおまかに褒めるのではなく、一人ひとりの子どもがどのように育っているのかをつぶさに見て、具体的に褒めることが重要なのだと感じています」(山口先生)

塩崎校長は幼稚園教諭と園長を務めた経験があり、その時と同様に人数が多くなっても子どもの名前と顔は全員一致するようにしている。「校長の仕事の一つは子どもの良さを皆に伝えることです。良いことはすぐに伝えたいのでメモを置きます。これは先生方にも言えることで、どの先生にも良いところがあります。それを引き出して皆に伝えるのが、私の役割です」(塩崎校長)

職員会議が終わるのは午後4時だが、そこから1時間、教師の情報交換が続くのが恒例だ。困ったことがあれば、一人で抱え込まずに周りに相談できる雰囲気があるからだ。「理想の上司ともいえる塩崎校長の下で、とにかく自分が実践して、子どもたちや先生方と共に進もうと考えています」という飯野教頭の言葉からも、学校の一体感が伝わってくる。

「問題を抱えていても、皆に相談すれば何とかなると思えるのが本校の強みです。これからも『子どものため』という視点を変えずに研究を続けていきたいと思えます」(山口先生)



学校事例 ④

東海北陸 地区

愛知県
名古屋市立東桜小学校

全員が同じ土俵で行う 授業研究を核に、子どもも 教師も学び続ける集団に

どんな大人になってほしいか



- 自分の根っこ（得意なこと、郷土愛）を持てる人
- 自分の頭で考えて自分の意見を言える人
- 相手の意見を取り入れて、柔軟に変化することが出来る人
- みんなと共同作業が出来る人

そのための小学校の役割



- 一人ひとりの子どもの良さを見つけて伝えること
- 生涯にわたって「学び続けたい」と思える意欲を育むこと
- 子ども同士が学び合える話し合い活動が出来る指導法をつくり上げること
- 学習習慣や生活習慣をはじめ、小学生の間に身に付けさせたい基礎的な力を付けること

未来に残したい 東桜小学校の力強さ

- ◎ 子どもの学ぶ意欲を育むこと、学び合う楽しさを伝えることを学校の役割と捉え、そのための授業づくりに、教師全員で一丸となって取り組んでいる
- ◎ 授業だけでなく教育目標づくりなどでも、全ての教師が同じ土俵で話し合い、考えることで、集団の質を高め、教師自身も学び続ける集団になることを目指している



名古屋市立東桜小学校
教務主任。 「自分の生活する地域で、周囲の人と上手にかかわり、仲良く協力して過ごせる子どもを育てたい」

山本伸吾
Yamamoto Shingo



名古屋市立東桜小学校教頭
 「自分の良さを見つけ、向上心を持って少しでも高めようとする子どもを育てたい」

土屋眞治
Tsuchiya Shinji



名古屋市立東桜小学校校長
 「昨日より一歩前進している自分でありたい。校長として一日一日、子どもが前進できる学校をつくりたい」

坂野重法
Banno Shigenori

School Data

設立 1872(明治5)年

校長 坂野重法先生

児童数 261人

学級数 10学級

所在地 〒461-0005

愛知県名古屋市東区東桜1-13-1

TEL 052-961-7877

URL <http://www.higashisakura-e.nagoya-c.ed.jp/>

公開研究会 未定



学び合う楽しさを伝え 学ぶ意欲を育みたい

名古屋市立東桜ひがしやま小学校は名古屋市の中心部に位置している。自然や虫に興味を持ち、心優しい、落ち着いた子どもが多く、家庭や地域は、学校に対してとても協力的だという。子ども様子について、坂野重法校長は次のように話す。

「どの子どもも礼儀正しく素直で、家庭で大事に育てられているのを感じます。基本的な学習習慣や生活習慣が身に付いている子どもが多いため、授業づくりに多くの力を注ぎやすいのは、本校の強みです」

子ども同士の仲も良く、校内は温かい雰囲気にも含まれている。その反面、多様な人間関係の中でもまれる経験が少なく、自分の意見を積極的に出すたくましさ欠けることが課題だという。

同校の校内研究のテーマは、「意欲的に学び続ける子をめざして〜学び合える話し合い活動を通して〜」だ。授業での学び合いを通して、学ぶ意欲を育む研究に取り組む。研究テーマの背景にある思いを坂野校長はこう語る。

「以前に比べ、子どもが学習に意義を見いだしにくい時代になっていると思います。社会が変化し、良い大学や会社に入るために学習するという前提が崩れ、『どうして勉強しなければならぬの?』という子どもの疑問に答えにくくなっています。そんな状況下で、私たち教師

は、今まで以上に子どもに学ぶことの楽しさを教え、『勉強そのものが楽しい』『自分が成長するのがうれしい』と実感させて、もっと学びたいと思う意欲を引き出す必要があると考えています」

同校の授業を見ると、挙手をして発言したがる子どもが多く、十分に意欲を持っているように見える。しかし、土屋眞治教頭は、人の意見を聞いて自分の意見を深め、発展させたいという気持ちを抱くようになることが、本当の意味での意欲だという。

「発言が多いのは良いことですが、『友だちより早く言いたい』『自分の考えをたくさん言いたい』という気持ちからの発言は、ひとりよがり本校の目指す意欲とは言えません。友だちの考えをよく聞いて、自分の考えを変容させていくことの価値を理解し、友だちと学び合いたいという思いを持ってもらいたい。これが学校で勉強する意味だと思いますし、私たちの考える『意欲』です」

教務主任の山本伸吾先生も次のように話す。「意欲は、教師が教えて育つものではありません。子どもが自分で学びたいと思えるようにどのように導くのか。教師が言わなくても興味を持ったことを調べる、自分だけでなくみんなにも教えたいと思う、友だちの考えを取り入れようと思う。そうなった時が、意欲が高まった時だと思えます。このように感じる授業をつくりたいと思っています」

授業中の発言記録と検討会で 共同で授業をつくり上げる

学習意欲を高める授業づくりの研究は、2009年度から続けている。10年度までは、まず学習意欲とは何かを考えることから始め、学習意欲の土台として、基礎・基本となる学習習慣をしっかり身に付ける指導に取り組んだ。更に、話型やハンドサインを用いるなどして、子どもが自分の考えを上手に表現すること、そして、友だちの考えに対して賛成・反対・付け足しなどを表明する力を育てることに注力してきた。11年度は、学び合いによる考えの変容など、一人ひとりの考えがより深まることを目指している。

「教師の発問」は重要な研究テーマの一つだ。発問は、答えが一つではない「オープンクエスチョン」にすることを心掛けている。例えば、「アメリカ大陸を発見したのは誰か」という質問は、答えが一つしかない「クローズドクエスチョン」であり、知っている子どもしか答えられない。そこで、「どうしてアメリカ大陸を発見したいと思ったのか」など、オープンクエスチョンにして多様な考えが出やすいようにする。また、子どもの考えをつなぐ問い返しの仕方や板書の仕方も工夫する。

このような授業をつくるために、同校が大切にしているのは授業研究だ。教師全員がそれぞれ年間1回以上公開授業を行い、事前・事後検

討会も低・中・高学年の部会に分かれて、その都度開く。他に年2回の全体公開授業も実施している。

事前検討会では、指導案の作成だけでなく、教師が子ども役になる模擬授業を必ず行う。山本先生は、そのねらいを次のように説明する。

「指導案は頭の中で描いたものなので、実際に授業をしてみると予想外のことが起こります。模擬授業を行うことによって、発問が分かりにくかったり、子どもから想定していない反応があったり、授業の展開がスムーズではなかったりすることに自ら気付く、授業前に修正できるので」

授業の「リハーサル」を行うことは、授業者だけでなく、子ども役として参加した教師にとっても大きな意味がある。授業の流れや発問の内容を事前に把握しておけるので、授業では子どもの様子をより見取ることが出来、事後検討会での議論が深まるからだ。授業者と他の教師が共同で授業をつくり上げていく意識が持て、教師集団としての一体感も強まる。

公開授業では、教師の発問や子どもの発言の全てを、担当者がパソコンで記録する。授業後にすぐに印刷して、事後検討会の議論の材料とするためだ。

「事後検討会は、『授業はこうあるべき』などの抽象的な議論になることがあります。詳細な授業記録があると、事実を即した話し合いが

出来、解決策も具体的にになります」(坂野校長)

**皆が同じ土俵で
一生懸命に授業をする**

坂野校長が全ての公開授業を参観し、講評を書いて教師全員に配るのも特徴だ。授業が終わるとすぐに気付いたことなどを書き始め、A4版4〜5枚の量に講評をまとめて、基本的に当日、配布する(図)。

「先生方の授業を見せてもらい、勉強させてもらうことへのお礼を込めて、コメントをしています。授業者に対して個別にアドバイスもしますが、講評を先生方全員に配布するのは、例えば『この部分を見習ってほしい』といったことを他の先生に伝えたいからです。私も先日、模擬授業をしましたが大切だと思っただけ、若手教師もベテラン教師も、皆が同じ土俵の上で一生懸命に授業をすることです。ベテラン教師が一生懸命、教材研究をする姿を見て、若手教師

図 坂野校長による公開授業の講評(一部抜粋)

の考えに先で加減・修正させる作業をさせて、最終的な考えをもたせることにする。このように、個人の考えが豊富になると、学習意欲が高まったと考える。

③ 学び合える話し合いの子どもの発言分析
学び合える話し合いは、多様な考えを出させることが必要である。そこで、一つの発問で、子どもの発言がいくつつながっていかを数量的に測ることにする。数多くつながった方が多様な考えを出させ、学び合える話し合いであると考える。
具体的には、友達の見解を聞いた後、それを受けて、「賛成」「反対」「付け足し」「質問」などの「つなぎの言葉」をつかって発言をつなげていく。また、話し合いがなされるように、意見だけでなく、その根拠を言わねばならないようにし、同じ考えでも、根拠が違ってもある。根拠を言わせることにより、相手にも考えが伝わるし、話し合いも深まる。
それに加え、それぞれの多様な考えが並列して出されるだけでなく、分類したりまとめたりして質的に高まっていく話し合いをさせる。そこで、次のような発言ができるように指導していきたい。
○ 友達の見解をグループ分けして整理する。
○ 友達の見解と発言をまとめる。

⑤ 学び合える話し合いにするための教師の発問
多様な考えが出るようなオープンクエスチョンにする。正しい解を探したい。子どもの発言をつなげるには、一人一人の子どもの考えを他の子ども1対1の受け答えにならないようにする。また、発言をよく聞かせたい。子どもの発言を促すためにも、教師が「発言の整理」「発言のまとめ」をすることが必要である。

2 授業分析
① 教師の発問・指示
A—思考の要求 B—ゆきさぶり・視点の転換 C—語り下げ・焦点
② 児童の発言
①—新たな考え ②—賛成意見 ③—付け足し意見 ④—反対意見

教師の発問と児童の発言	発言の種類	学び合
T 今日、3の場面の後半を中心にみんなで話し合います。3の場面の後半のねらいを言います。「大達じいさんはなぜ残雪をうたなかつたのでしょうか。」みなさんの課題はホワイトボードに書いてあります。1番多か	A	

授業については教師の発問と子どもの発言を並べ、詳細な分析やアドバイスが書かれている

った課題はこれです。今日は大達じいさんの考えをみんなでも考えよう。		
T 1番目はどういう作戦を立てた？どんな気持ち？ ゆた：うなぎつり・・・1の場面だ。	①	○ ここでは、大達じいさんの気持ちを探っている。 ● どんな気持ちで、どんな作戦を立てたのか、答えていない。十分理解していない子どもがいたら、もう一度、発問を繰り返すとか、発言の意図を尋ねるなど、ゆたに意の発言を促したい。
さら：大達じいさんが残雪をとらえたい。	①	○ 「残雪をとらえたい」は、気持ちを書かした。
一人一人で線を引いたり、付せんし書いてたりする。線を引けたと思います。これから本領発揮です。今日の課題にしていることを探しましょう。大達じいさんの気持ちや残雪の行動など関係しているかも。残雪の気持ちを読み取れるところがあるかもよ。今までなかったよね。	A	○ 一人一人の子どもを教材に向かわせる時間は確保することが大事。 ○ 座席数などを活用し、一人一人の子どもがどんな考えをもっているか、チェックしておくの良い。 ○ すでに学習した内容から考えを引き出そうとしている。
できている子は1、2の場面を思い出してくらべてみよう。それでは、話し合いをしながらかんてきた言葉を書いてもらいます。		
T 話し合いをします。なぜ大達じいさんは残雪をうたなかつたか。	A	○ 主発問の繰り返し。
あさ：僕は上の2行目のふたたびじゅうをおろしてしまいました。大達はなぜじゅうをおろしたかというと、23〜24から、残雪の目には人間も・・・なかつたところから、大達じいさんは残雪は・・・	①	○ あさ：君は、残雪を撃たなかつた場面を執を執おろしたときと考えた。通常の考え方である。 ○ 23〜24の文を根拠に説明している。
ゆた：あさ君につけたし、残雪は人間もはやさなさいからじゅうをおろした。	③	● 「残雪は人間もはやさなさいから」という根拠で意見をつけた。これが、撃たなかつた根拠になるだろうか。追加質問が必要。 ● 残雪がはやさなさいに取った行動である。残雪の気持ちである。大達じいさんの考えとは違う。
けん：25行目から残雪は仲間へ手を出すな。と思っ	③	
てや：下の18〜19から、残雪はずこいなと思っ	①	○ てや：君は、残雪を撃たなかつた場面を最後の場面と考えた。そして、「強心を打たれたたの鳥に對しているような気がしなかつた」ことを理由にあげている。

*同校の資料をそのまま掲載。子どもの名前は仮名

も頑張ろうと思うでしょう。教師の技も伝承されていくと思うのです」(坂野校長)

「坂野校長のコメントは皆が楽しみにしており、配られるとすぐに読み始めます。自分の授業を振り返る、また他の先生方が学ぶ貴重な機会となっております」(土屋教頭)

時には厳しいコメントも含まれるが、それは教師の指導力を高めるために不可欠だと考える。地域的に保護者が教育熱心であり、学校への期待が非常に高いこともあり、全ての教師が一定水準以上の授業を出来るように育て、教師や学校を守っていききたいという思いも強いという。

坂野校長の姿勢に見られるように、同校では教師が話し合い、共同で授業や学校経営を考える方針を大切にしている。例えば、学校教育目標は、中・長期ビジョンに照らし合わせ、各部署が単年度の具体的な目標をつくり上げる。

「子どもと日々接している教師が検討するからこそ、具体的な目標を設定できます。更に、自分たちで決めた目標だから達成しようという強い気持ちが生まれます」(山本先生)

坂野校長はこのように話す。「校長一人が力んで全てをトップダウンにしても、先生方はその気にならず、目標は『絵に描いた餅』になってしまいます。共同作業は集団の質を高め、人間関係を良くすることにもつながります」

年度末には、学校関係者評価の際に、各部署

の部長が保護者や地域住民に対して、目標に対する成果や課題をプレゼンテーションする。

「学校関係者評価の関係者には、課題は指摘してもらいますが、良い取り組みや成果に対しては、『出来るだけ、先生を褒めてほしい』と話しています。子どもと同じく、教師も学び続けなければなりません。その上で、外部から良い評価をいただくことは、とても大きなやる気の源になります」(坂野校長)



10年先、20年先を見据えた時、研究テーマである「意欲的に学び続けること」はますます重要になると、同校は考える。その学び続ける姿勢を育てるには自己肯定感を高めることも

重要なことだと、土屋教頭は言う。

「得意なことを自覚できると、自信を持って自分を高めることが出来、それが成長につながると思えます。ですから、一人ひとりの子どもの良さを見つけて、伝えるようにしています」

また、山本先生は、自分を認められた次の段階として、人と互いにかかわり合うことが大切だと言う。

「郷土に愛着を持ち、その上で世界の人たちと仲良くしていける子どもになってほしいと思

います」

二人の先生の話を踏まえて、坂野校長は次のように話す。

「価値観はますます多様化し、今後どのような社会になるのか分かりません。だからこそ、得意なことや郷土愛という自分の根っこを持つことは、とても大切だと考えます。そして、『自分の頭で考えて自分の意見を言う』『相手の意見を取り入れて柔軟に変わっていく』『みんなと一緒に共同作業をする』という三つのことが出来れば、充実した生き方をしていけるでしょう。小学生の時に身に付けるべき学習習慣や生活習慣を土台とした上で、生涯にわたって意欲を持ち、学び続ける人間になってほしいと思います」

学び続ける姿勢に関しては、教師も同じだ。学び合いを意識することで、子どもの見方、授業の組み立て方、授業研究の仕方などが変わってきた。更に、教師同士が協力し合うことで、授業の質を少しでも高めていこうと努力している。

「一人で教壇に立つ教師は、孤独な気持ちになりがちです。だからこそ、教師の全員参加による校内研究や学校づくりを心掛け、坂野校長を中心に皆で一つになって進んでいきたいと思っています」(土屋教頭)

東桜小学校は、将来に向けて、子どもも、教師自身も、学び続ける集団であることを目指している。



どんな大人になってほしいか

- 知恵と知識を持ち、人とのかかわり合いを大切にしながら自分の力を発揮できる人
- しっかりした土台を持ち、自分の力を出し切って夢を実現できる人
- 自分で人生を開拓していける能力とやる気を持った人



そのための小学校の役割

- どの学校へ行っても通用する教師（＝「自分流」を持てる教師、「一つひとつのことを丁寧に言いながら子どもを育てる姿勢を持つ教師」）を育てること
- 常に「取り組みが子どもの成長のためになっているか」を考えて指導をし続けること

未来に残したい 羽束師小学校の力強さ

- ◎ 教師一人ひとりがしっかりと「自分流」の指導観を持ちつつ、「子どもの成長につながっているのか」という点において、全員の思いが共通している
- ◎ 互いの思いや願いを受け止め、「学校家族」を目指して教師同士の信頼関係をつくりながら、プロ集団としての覚悟を持っている

京都府
京都市立羽束師小学校

プロ集団としての「学校家族」を
目指し、個々の教師が
持ち味を生かせる学校へ



学校事例 ⑤

近畿地区



京都市立羽束師小学校
荒木龍男
Araki Tatsuo
5学年担任、学年主任。「真理・真実を追究したい」



京都市立羽束師小学校
森口光輔
Moriyuchi Kosuke
6学年担任、学年主任。「長期的、計画的に出来る教育活動を大切にしたい。そして頼られる人に育ってほしい」



京都市立羽束師小学校教頭
中村博美
Nakamura Hiromi
「小学校6年間で子どもの描く夢がかなえられる土台の力を付けたい」



京都市立羽束師小学校校長
西澤安夫
Nishizawa Yasuo
「夢と希望の実現に向けて、子どもたちが自己の可能性にめいっばい挑戦する学校を目指したい」

School Data

設立	1978(昭和53)年
校長	西澤安夫先生
児童数	923人
学級数	32学級(うち特別支援学級3)
所在地	〒612-8487 京都府京都市伏見区羽束師菱川町640
TEL	075-934-1501
URL	http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=117708
公開研究会	未定



「子どもの成長のため」を第一に考えた指導

「子どもの成長のために、自分は何が出来るのか。皆さん、それぞれ強い思いや願いを持っていると思います。まずは、皆さんの思いや願いを全て教えてください。私はその思いを受け止め、出来るだけ応えていくところから学校経営を進めていきたいと思っています」

これは、3年前、西澤安夫校長が京都市立羽束師小学校に着任した際、全教職員に語り掛けた言葉だ。「子どもの成長のために」を第一に考えること、そして、「子どもの成長のために」考えたことを教職員が提案しやすい環境をつくり出していくこと。この2点を強調したのは、当時、同校は二つの課題を抱えていたからだ。一つは子どもの課題だ。同校は、工業エリア、商業エリアに加え、新興住宅街が混在する地域にある。家庭環境も多様で、経済的な困難を抱える家庭も多い。学習習慣が定着していない児童も多く、西澤校長の赴任時、児童の学力は京都市内でも下位にあったという。

二つめは教師の課題だ。自分の指導観を持つ個性的な教師が多い一方で、その思いが別々の方向を向き、学校全体としての結束力が弱かった。時として、子どもの姿よりも自分のこだわりが優先されているように感じられる状況もあった。このことが伝わっていたのか、落ち着

きがなく、教育活動にも集中して取り組めない子どもが多かったという。西澤校長は次のように話す。

「教師が強い個性や思いを持つことは大切です。学習指導要領の内容を『どう教えるか』こそ教師の腕の見せどころですから、自分なりのこだわりを持ち、それぞれが良いと考える取り組みをしてほしいと思います。ただし、その時に大切なのは、『取り組みが本当に子どもの成長のためになっているか』を常に念頭に置いているかどうかです。共通の思いを持った上で、一人ひとりが『自分流』の技を磨いていくことが出来れば、学校全体としての教育の質が一気に高まるのではないかと考えます」

これらの課題を解決するため、まずは学校教育目標を見直した(図)。その上で、西澤校長がまず心掛けたのが、教師一人ひとりの思いや

図 学校教育目標

◎重点目標

豊かな人権感覚を育み、未来を切り拓く個の育成を目指して

～人を大切にする子、
しっかり学習する子、元氣な子～

- は** はきはきと思いや考えを伝える子
- づ** ず(づ)っと地域を愛する子
- か** かわらぬ友情を大切にする子
- し** しっかりと話が聞き取れる子

考えを受け止めることだった。

「教師個々の取り組みが学校全体として一つの方向に向かわず、学力も低迷していたのは、教師一人ひとりの思いを受け止め、その思いをどうすれば子どものための取り組みにつながるかを、学校全体で考え、実践する環境が整っていなかったからです。そこで、私は『学校家族』をつくることを目標にしました。教師の思いを受け止めることに加え、教師が抱える児童や保護者の状況を理解して共有し、支援し合う関係です。管理職と教師、教師同士の信頼関係や共に実践しようという雰囲気があれば、教師の自発性は生まれません」(西澤校長)

教師の提案に筋が通っていれば、学校の取り組みとして承認し、教師全員で共有する。そうすることで他の教師の協力も得やすくなるし、結束力も高まるという。

同校の全教師約50人のうち20人以上は、教職歴6年未満の若手教師だ。そのため、若手教師



京都市立羽束師小学校
八田久美子 Hata Kumiko

栄養教諭。「子どもたちと食べる楽しさを共感し、食事を大切にする心を伝えたい」



京都市立羽束師小学校
鹿野公子 Kano Kimiko

4学年担任、学年主任。「人とのつながりを大切に、子どもたちを温かい人間環境の中で育みたい」

が管理職や先輩教師に自分の思いを伝えられるように心掛けています。中村博美教頭は話す。

「こちらから積極的に声を掛けたり、頑張っていることを必ず評価したりするようにしています。また、西澤校長は、職員室で空気を和ませて、話しやすい雰囲気をつくってくれてます」

更に、大切なのは「子どものことをよく知ること」だと、中村教頭は強調する。

「一人ひとりの子どもを担当ませせせず、朝会や職員会議では、どの子にどのような出来事があったのかを、教師全員で共有するようにしています。課題が多い子どもについては、特に担任の負担が大きいので、管理職も、教室の中だけでなく、遠足などの学校行事での様子や地域や家庭の事情を知っておき、子どものことを共有しています。担任と話し合えることが自然と増え、結果として支援することにつながります」

「学校家族」とは、仲良し集団ではなく、「志」を同じくしたプロ集団である。一人ひとりが教育に責任を持つ覚悟が必要になると、西澤校長は言う。例えば、保護者から苦情が寄せられた時には、まず担任一人で家庭訪問をさせる。ここで事態が収拾せず、保護者に何か言われたとしても、それは教師が成長するために乗り越えなければいけない壁だと考えるからだ。ただし、状況の改善が見られない場合には、「いつでも

一緒に行く」と伝える。

「若手教師でも安心して困難に立ち向かえる環境をつくることで、自発性が育ちます。教師は、子どもにやさしさや仲間を大切にすることや、自分の個性を発揮することを求めます。教師にも全く同じことが言えるのです。教師一人ひとりが力を発揮し、力を伸ばすための環境づくりは、子どもの教育環境づくりと同じと捉えて励んでいます」(西澤校長)

個々の持ち味を生かした指導が みんなに認められる環境をつくる

子どもの実態に合わせて、教師が自発的に実践することを大切にしている同校では、具体的な実践は各学年に任されている。各学年の取り組みを4〜6年生の学年主任、そして栄養教諭に聞いた。

◎6年生―学級間での授業交換

2週間に3回、担任が他の学級の授業を行う「授業交換」を、年間を通して実施する。誰がいつどの学級を担当するのかが分かる1週間のスケジュール表を作成し、先々の見通しを持てるようにしている。

「授業交換は、教師同士の良い刺激にもなっています。同じ指導内容でも、学級によって児童の反応が異なるため、自分の学級の良さや足りないものが見えてくるからです。また、新しい取り組みを行う時には、誰もが『少し工夫す

れば出来る』と思えるように、取り組みやすい環境をつくることを心掛けています。こうすると、他の学年でも取り入れやすくなり、学校全体の活性化にもつながると思います」(森口光輔先生)

◎5年生―「自主勉強ノート」での反復学習による基礎・基本の徹底

家庭学習習慣と、基礎・基本の定着のため、家庭学習用の「自主勉強ノート」を用意し、毎日2ページ以上、年間10冊以上を目指した取り組みを行っている。内容は、毎日の学習やテストの復習が中心だ。

「やり終えた『自主勉強ノート』が増えると、子どもは達成感を得られます。この取り組みを始めてから、学級が落ち着いてきました。学力が付いてくると、生活も安定し、子どもはすくすく育ちます」(荒木龍男先生)

◎4年生―なんでも言い合える関係づくり

算数の授業を中心に、自分の考えを他人に分かりやすく話したり、他人の意見をしっかりと聞き、話し合ったりすることを目指した取り組みを行っている。

「『自分の学級だけ』ではなく、どの学級も同じことが出来るように、学年団で密に話し合う機会を多く設けています」(鹿野公子先生)

◎食育―小学校と中学校の昼食の違いを学習

6年生では、小学校と中学校での昼食の違いを指導する。京都市立の中学校は家庭からの持



写真 教師の結束力は、子どもの結束力として実を結ぶ。2010年度の運動会では6年生が組み体操で80人による7段ピラミッドを作った。ピラミッドの後ろや土台を支える子どもも「頑張れ」と叫び続け、完成すると場内から大歓声が上がった。80人全員が主役となった瞬間だ

参の弁当か弁当給食を選択するため、バランスの良い弁当とはどういうものか、体格や運動量に合わせてどのくらいの量を食べる必要があるかなどを説明する。実際に中学校の給食を教材として、子どもが自分で持ってきた弁当箱に詰める作業をさせ、栄養面でのアドバイスもした。「栄養教諭は一人だけなので、授業では、子どもだけでなく先生方にも話し掛けるといいう意識で行い、食べることの大切さを折りに触れて子どもたちに伝えてもらっています」(八田久美子先生)

各学年で特色ある取り組みは異なるが、「子どもの成長につながっているか」という点においては共通している。6学年主任を務める森口

先生は、次のように話す。

「以前は、他の先生の取り組みや細かな考えが異なると受け入れられず、感情的に議論してしまうこともありました。西澤校長や中村教頭の言動から『まずは何でも受け入れる』という姿勢を感じ、取り組み内容は異なっても『思いは一緒』と考えられるようになりました。今では、若手の先生に『校長室で思いを伝えてきてみては』とアドバイスしています。ある若手の先生が校長室に行ったまま、2時間以上も帰ってこず、心配して様子を見に行くと、西澤校長と差し向かいで、授業研究の指導を受けていたこともありました」

このような意識が学校全体に広がり、取り組みが充実したことにより、子どもの学力は徐々に向上した。生活態度も落ち着き、子どもたちは、力を合わせて一つの取り組みを成し遂げられるようになってきた。運動会での組み体操はその成果の一つだ(写真)。

育てたい大人像と
そのための小学校の役割
どこに行っても通用する
教師を育てる

子どもには、将来どのような大人になつてほしいのか。先生方に聞いた。「社会に出て活躍できる、しっかりした土台を持った大人になつてほしい」(森口先生)

「将来は不透明かもしれないが、それに負けずに、将来を自分自身の手で開拓していける能力とやる気を持った大人になつてほしい」(荒木先生)

「人とかかわりを大切にし、迷った時には手助けや助言をしてくれるなど、周りに自分を育ててくれるような人がたくさんいる大人になつてほしい」(鹿野先生)

「なにかやりたいことがあっても、健康でなければ挑戦できない。そのためにも、自分の体のことや食事のことを大切に出来る人になつてほしい」(八田先生)

「自分が持っている力を全力で出し切り、夢を実現できる大人になつてほしい。そして、自分らしさを形作ってほしい」(中村教頭)

「知恵と知識、そして人を大切に思う思いを携え、自分の力を発揮できる人になつてほしい」(西澤校長)

そうした人に育てるために小学校で果たすべき役割は、どのような学校で勤めることになつても通用する教師を育てることだと、西澤校長は話す。

「子どもの成長を願いながら、『自分流』を持つ教師、一つひとつのことを丁寧に行いながら子どもを育てる姿勢を持つ教師を育てていくのが私の役目です」

一人ひとりの指導観や取り組みは多様だが、「子どもの成長」への思いを一つにして、同校は今日も前進し続けている。



学校事例 ⑥

中国地区

広島県
広島市立千田小学校地域の素材を活用した
教材開発をし
子どもの社会性を育む

どんな大人になってほしいか



- 社会の一員として、社会に積極的に参画する人。周囲と「共生」しようとする人
- 人の心を豊かに想像する感性を持ち、思いやりのある人
- 「スマートさ」だけでなく、人間味のあふれる人

そのための小学校の役割



- 子どもが地域の人を介して社会を探究し、生きて働く知恵を獲得し、「社会化」を進められるようにすること
- 小学校6年間を見通し、体系的かつ系統的なカリキュラムを策定し、PDCA サイクルを回して実践を積み重ねること
- 子どもに自分も社会の構成員であることを意識させ、社会参画の活動を体験させること

未来に残したい 千田小学校の力強さ

- ◎ 継続的な教材開発に努めつつ、数年に1度の研究発表の成果を活用することで、開発教材の教育性を高める
- ◎ 役職や経験年数の枠を超え、教師集団がそれぞれの強みを生かして学び合える授業研究の共同体の力を高め、授業の充実に向けてアイデア交流を行っている



広島市立千田小学校教頭
岡田誠嗣
Okada Seiji
「学んだことを土台に、自分で更に何かを求めていける子どもを育てたい」



広島市立千田小学校校長
吉竹邦昭
Yoshitake Kunaki
「教育に感動は不可欠。子どもたちに感動を与える教育を心掛けたい」

School Data

設立 1924(大正13)年

校長 吉竹邦昭先生

児童数 584人

学級数 22学級(うち特別支援学級3)

所在地 〒730-0053

広島県広島市中区東千田町2-1-34

TEL 082-241-8623

URL <http://www.senda-e.edu.city.hiroshima.jp/>

公開研究会 2011年11月下旬





写真 校内にはイチヨウやカイヅカイブキなどの「被爆樹木」が多数ある。戦後、地域の協力を得て、校区内にある被爆しながら生き残った樹木を移植した。同校は市内有数の緑豊かな学校となっている

社会参画への意欲と 行動の基礎を育む

広島市立千田せんだ小学校は、広島市の中心部に位置する。同校には広島大が隣接していたこともあり（現在は東広島市に移転）、文教地区として、今も教育への関心が高い土地柄だ。校区には古くから住んでいる世帯が多く、親子三代にわたって同校に通う家庭もある。地域の人がちが作ったコンクリート製の小さな山やつり橋のあるアスレチックのような遊び場が校庭にあり、地元の人たちに愛されている様子がうかがえる。

校内には、いくつもの被爆した樹木や石、記

念碑が残っており、修学旅行で広島を訪れた生徒が立ち寄ることがある（写真）。爆心地から同校まではわずか2キロ。当時、多くの子どもが都市部を離れて疎開していたが、残っていた子どもと教師合わせて44人が犠牲になった。毎年8月11日には、同窓会主催による慰霊祭が開かれる。

2011年度に赴任した吉竹邦昭校長は、子どもの印象を次のように語る。

「本校の子どもの良さは、社会的な出来事に対する関心が高いところですね。物事を論理的に解釈する力も高いと感じました。ですから、それらが社会に積極的に参画する姿勢や行動に結び付けてほしいと思っています。そこで、人の生き方を通して、社会を見て、追究できるようにするために、地域にある素材を掘り起こして教材として開発し、授業で実践できればと考えました。真に問題解決の出来る体験学習が充実すれば、子どもたちの社会参画への意欲も高まると思ったのです」

こうした背景から、同校では生活科・社会科を中心に、地域と連携し、地元の素材を生かした教材開発や授業づくりに伝統的に力を入れてきた。1971年、92年、2005年の過去3回、「全国小学校社会科研究協議会研究大会」の会場になるなど、先進的な教育活動に取り組み続けている。この蓄積を生かしながら、開発教材等の教育性を高める授業づくりを追究している。

学習指導要領を読み込み 地域の素材に結び付ける

05年の全国大会で同校の研究発表を担当した岡田誠嗣教頭は、「本校で全国大会が開かれるとなると、先生方の意識も大いに高まっています」と振り返る。吉竹校長が続ける。

「大会のために研究するわけではありませんし、大会が終わったら熱が冷めていくわけでもありません。本校には、大会を一つの基点にしながら、その成果を組織的に受け継いでいく文化が根付いています」

全国大会は大きな節目ではあるが、他の時期でも教材開発に意欲的に取り組む。10年度は、「自主公開」という形で全国大会での発表と同じように教材開発に取り組んだ。

同校の生活科・社会科の教材開発には、主に三つのポイントがある。一つめは地域素材を活用すること、二つめは実際に教材として役に立ち、かつ単元全体や教科を超えた視点を盛り込むことだ。地元に住む人々、名産品や企業を教材に取り上げることで、子どもは地域への愛着を持つようになる。また、日常生活と関連付けた学習によって、自ら学ぶ意欲を高めることが出来る。

「単に知識だけの物知り博士では、本当の力は付きません。自分で調べたことで分かる楽しさを味わったり、『もつと調べて、こんなことを知りたい』と自分から楽しめるようになった

りすると、中学校、高校に進んでからも学習が楽しいと感じるでしょう」(岡田教頭)

教材開発・研究の過程で更に加味する必要があるのは、単元の幹となる「学習課題」の設定だという。

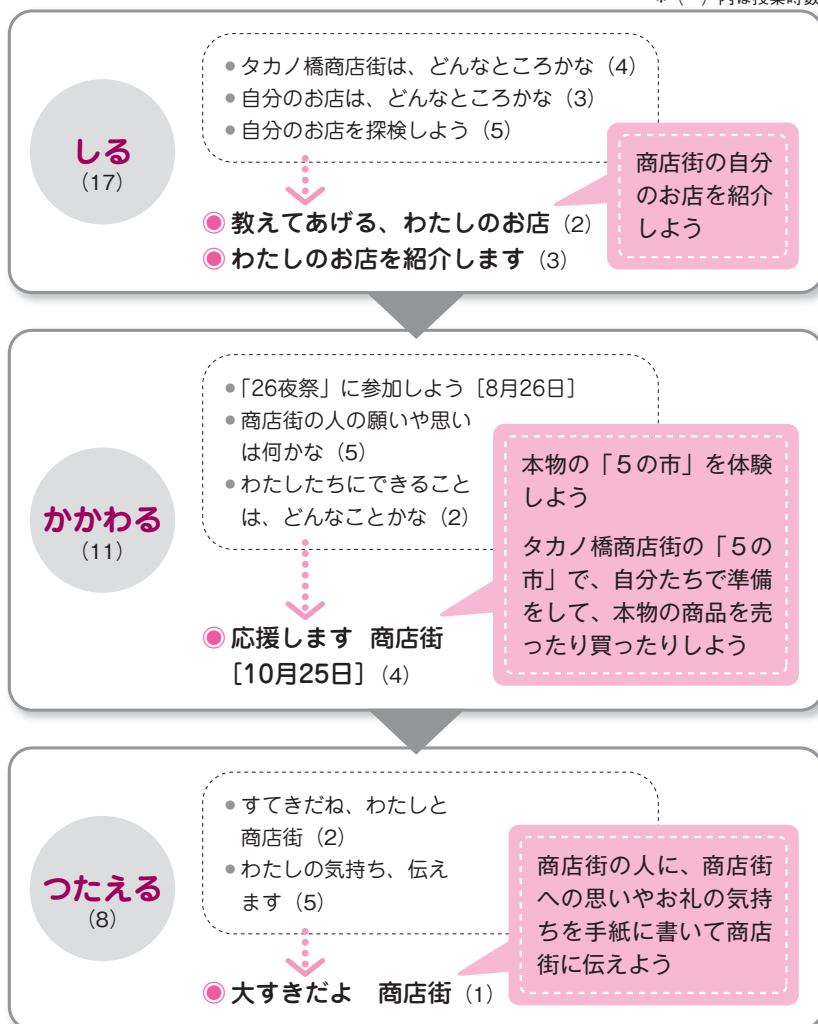
「調査や見学という具体的な活動や体験に重点を置きながらも、体験して終わり、調べた結果を発表して終わりというのでは、子どもに力が付きません。まず学びの動機付けが必要です。そのために学習課題の設定を一層工夫し、どのような形で子どもに提示すれば学びが深まっていくのかを考えることが大切です。更に、社会科だけではなく、他教科と関連させて総合的な単元にしていく視野も持たなければなりません」(吉竹校長)

教材開発の三つめのポイントは、学習指導要領の内容との関連性について、地域素材を吟味・検討することだ。例えば、岡田教頭は7年前、広島名物お好み焼き用ソースの製造の工夫やメーカーによる違いなどを調べる教材を開発した。これは現在、市内の小学校で使われる副教材に掲載されている。

「この教材を作るに当たり、学習指導要領を何回も読み込みました。学習指導要領のどの部分の力を付けることになるのかを確認するためです。地域にある素材が教材となるかどうかは、素材の中に学習指導要領でねらいとしている内容と一致する点を見つけられるかどうかにある

図 2年生「わたしの町のしょう店がい」の学習指導計画(全36時間の概要)

* () 内は授業時数



最終的には子どもたちのためになるのです」

子どもにも 社会に参加する義務がある

「といます」(岡田教頭)

多忙な中でも、学習指導要領を読まざるを得ない状況をつくることは、授業研究を深める契機の一つになると吉竹校長は指摘する。

「先生方に適度な負荷を掛けていくのも、授業研究の意義だと思います。多忙だからこそ、節目は必要です。研究指定を受けることは、先生方の授業力や教師力向上につながる節目となり、自己実現に迫ることになります。これらが、

同校が開発した教材の代表例を見ていこう。

2年生の生活科「わたしの町のしょう店がい」とび出せ！ 千田たんけんたい」は、05年の全国大会に向けて練り上げられ、今も続けられている単元だ。1年間を通して、校区にあるタ

タカノ橋商店街を盛り立てる人々と年間を通してかかわっていく学習を設定。学校の教育活動の柱である授業の一環として、地域の行事をしっかりと組み込んでいるのが特徴だ *同校の資料を基に編集部で作成

カノ橋商店街とかかわっていく(図)。

街中の商店街が苦戦を強いられている傾向が全国的に見られるが、同商店街では人とのつながりを大切に、消費者の要望に合わせたきめ細かい対応やイベントを行うことで振興を図っている。地域の子どもたちに商店街を好きになってほしいという思いを受けて、同校はさまざまな交流を深めてきた。その結晶として、同商店街を子どもが探検し、人とかかわり合いの中で地域の人や伝統の良さを発見していく単元を開発した。一時的な交流ではなく、1年間を通して、授業の一環として教育活動に位置付けているのが特徴だと、吉竹校長は話す。

「子どもも社会の構成員です。学びの結果を生かして自分なりに社会に働き掛ける義務があると考え、このような単元を開発しました」

授業では、タカノ橋商店街で毎月5日に開かれる「5の市」に学校として参加し、本物の商品を買ったり買ったりする。また、年3回ほど催される祭りにも参加し、住民とのつながり、絆を深める。商店街との連携は年間を通して続くため、商店街側にも相当な協力を得ることになるが、子どもから元氣と希望をもらえると、毎年快く受け入れてくれるという。

「子どもが必要を感じない見学やイベントでは、意味がありません。子どもたちにとって必然性のある見学や調査で、多くの発見、実感や納得が得られ、先生方もそれが認識できるからこそ、続いているのだと思います」(吉竹校長)

吉竹校長は着任早々、社会科の授業の導入部分の模擬授業を行った。より良い授業づくりのために、役職や経験年数の枠を超えて、教師全員がそれぞれの得意分野を皆で共有し、自分に足りないものを互いに補い合い、高め合うことが大切だと考えるからだ。

「先生方には子どもがわくわくするような授業をしてほしい」といつも語り掛けています。縁あって同じ職場にいる仲間です。校内研究は、意見交流を通して、授業力を含む教師力を互いに耕す場でもあります。まさに、自分たちの財産です。また、信頼関係や人間関係が深まっていく絶好の機会となるでしょう。若い先生方に伝えるべきことをしっかりと伝えていくことも私たちの役目です。それが若い先生を大事に育てるといふことだと思います」(吉竹校長)



育てたい大人像と
そのための小学校の役割
教師が得意分野を共有し
人間味あふれる人を育てる

今後の課題は、市が全校に設置した50インチのモニターや電子黒板といったICT機器の活用だ。例えば、子どもが作った作品を資料にし、提示したり比較したりする時にICTを活用できる。ただし、それを適切なタイミングと使い方で活用するためには、まだまだ研究が必要だ。ICTの活用は、言語活動の充実と関

連させて考えることがポイントだという。「言語活動は、体験などを通して学んだことを更に深めるための重要な手段の一つであり、ICTは、その効果を更に高めるツールです」(岡田教頭)

更に、6年間の教育課程の充実にも力を注ぎたいと考えている。

「小学校6年間でどう学びを積み上げていくかを考え、そのための中身を充実させる必要があります。更には、小中連携を強め、小中9年間をどうカリキュラム化していくかも今後の課題です」(吉竹校長)

人とかかわり、地域とかかわりを深める6年間を土台にして人間味のある大人になってほしいと、吉竹校長は語る。

「効率の良さや学力はもちろん必要ですが、社会の一員として、周りの人と共生し、社会に積極的に参画できる人間、人間臭くてたくましい人間、人の心を想像できる人間になってほしいと思います。例えば、電車やバスで立っている高齢者を見かけても、見て見ぬ振りをすることや、その存在にすら気付かない子どもが増えているように感じます。人に関心を持ち、人の気持ちを想像する感性が育っていないのではなにかと危惧しています。学校でも行事が精選され、効率性が求められるようになる中、たとえ時間が掛かっても、子どもたちにとって本物の知恵になり得るような営みを大切にしたい教育活動を行っていききたいと思います」

どんな大人になってほしいか



- 自分の住む地域を愛し、誇りに思える人
- 「自分だって、やれば出来る」と思える人
- 自分の意見をしっかりと持ち、他者の意見にも耳を傾けられる人
- 公共心を持った人

そのための小学校の役割



- 地域の子どもを見る目と声を謙虚に受け止めながら、多くの人との交流を通して、子どもの主体性とかかわる力を育成すること
- 保護者や地域の人々が学校にかかわる機会を積極的に設け、教師、保護者、地域が一体となって子どもを育てること

未来に残したい 栗林小学校の力強さ

- ◎地域、保護者と共に子どもを育て、学校を支えていこうとする姿勢
- ◎言語活動を取り入れた授業づくりや心の教育など、全員が学校教育目標の達成にかかわり、学年団を横糸、プロジェクトを縦糸として、一体となって教育活動に取り組む

香川県 高松市立栗林小学校

教師、保護者、
地域が一体となり
子どもたちの成長を支える



学校事例 7

四国 地区



高松市立栗林小学校
真鍋長嗣
Manabe Takeshi

現職教育主任、3学年担任。「他者の意見に真摯に耳を傾け、自分の意見を鍛えられる大人になってほしい」



高松市立栗林小学校
佐藤盛子
Sato Moriko

道徳主任、1学年担任。「努力すれば出来る、自分にだって出来る」。心からそう信じられる子どもを育てたい」



高松市立栗林小学校
三木省二
Mita Syouji

学校評価担当、5学年担任。「栗林地区に限らず、自分の住む地域を愛せる大人になってほしい」



高松市立栗林小学校校長
藤本泰雄
Fujimoto Yasuo

「子どもの生き生きとした姿を、家庭にも地域にも伝えられる学校をつくっていきたい」

School Data

設立	1884(明治17)年
校長	藤本泰雄先生
児童数	1193人
学級数	39学級(うち特別支援学級5)
所在地	〒760-0073 香川県高松市栗林町2-10-7
TEL	087-861-3438
URL	http://www.edu-tens.net/syoHP/riturinHP/
公開研究会	未定



六つのプロジェクトにより「主体性」と「かかわる力」を育成

高松市立栗林つりりん小学校は、児童数1000人を超える大規模校だ。かつてはこの地域に長く住む家庭の子どもが大半だったが、最近は保護者の転勤などで引越してきた家庭の子どもが増えている。それでも、学校に強い関心を寄せる地域性は変わらないという。運動会には、保護者だけでなく地域の人も参加するほどだ。

同校の子どもは、学力は比較的安定しているが、自分の考えを発表したり、自ら進んで行動したりする積極性に乏しいところがあった。また、友だちに対する気配りに欠ける行動が見られることも課題だった。

こうした課題を改善しようと、2年前から教師全員で検討を重ね、2011年度は学校教育目標を「よく学び よく遊び よく働く子どもを育てる」とし、「自主・思いやり・夢 チャレンジ」をスローガンに掲げた。藤本泰雄校長は、子どもに主体性と他者とかかわる力を付けたいと話す。

「将来、困難な状況に置かれることがあっても、周りの人と力を合わせながら、くじけずに全力を尽くせる人になってほしいと思います。大規模校のメリットを生かしながら、子どもの自主性を育て、他者とかかわる力を高めたいと考えました」

重点目標を踏まえ、①学力向上、②心の教育、

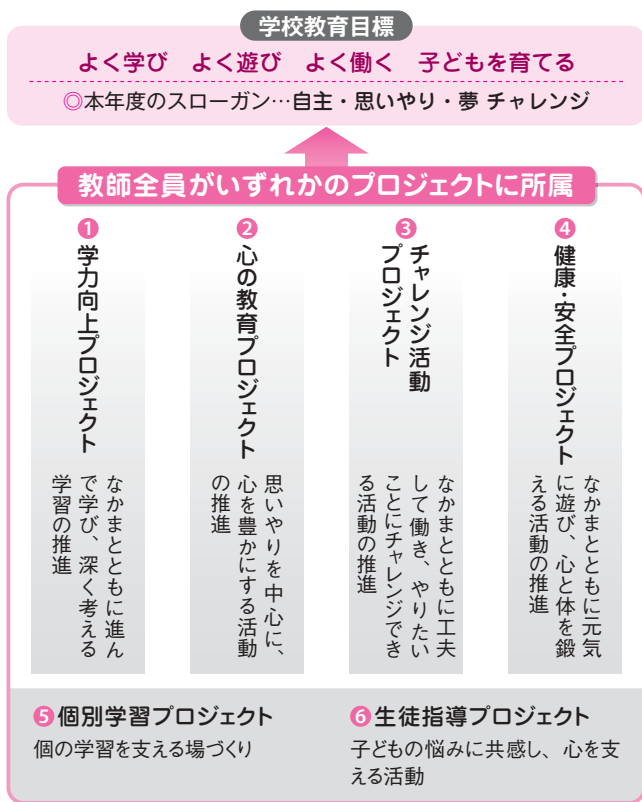
③チャレンジ活動、④健康・安全、⑤個別学習、⑥生徒指導の六つのプロジェクト部会を新設し、どの教師もいずれかのプロジェクトに所属する形にした(図)。一つの部会は10人ほどから成る。部会は月1回とし、どの教師も勤務時間内に無理なく参加できるように、校内研修の年間計画に組み入れた。どの部会にも全学年の教師が所属するようにしたため、各部会で話し合った内容は毎週の学年会議でも共有できる。

学校評価担当で5学年担当の三木省二先生は、全員で取り組む体制について次のように話す。

「六つのプロジェクトの内容は、以前から各学年で大切にしてきた活動ばかりですが、それを学校教育目標とスローガンに沿って改めて位置付けること

によって、学校全体としての取り組みにしていこうと考えました。学年団を横糸、プロジェクトを縦糸として、先生方全員の意識を一つにまとめ上げられればと考えたのです」

図 学校教育目標、重点目標と六つのプロジェクトとの関係



何人もの教師がアイデアを出し 言語活動の質を高める工夫を重ねる

プロジェクト元年である11年度は、六つのうち二つに重点を置く。一つめは、①学力向上プロジェクトだ。新学習指導要領の全面実施に伴い、全学年で言語活動を取り入れた授業づくりを始めた。言語活動が主体性やかかわる力の育成に適しているという部会の判断もあった。

10年度の反省ではどの学年の教師からも、「自分の考えを言えない子どもがいる」という声が上がった。検討の結果、「言語スキルの時間」を全学年で設けることに決めた。これは言語活動を進める土台となる力を付けるための時間

学校教育目標と重点目標を踏まえ、従来から取り組んできた教育活動を再編。それぞれの活動に特化したプロジェクト部会を設けた。個別学習プロジェクトと生徒指導プロジェクトは、全ての教育活動の基盤という意味を込めて他四つのプロジェクトの下部に位置付けている *同校の資料を基に編集部で作成

で、朝学習の時間のうち第4週・第5週の火曜日・金曜日を充てる。活動内容はあえて統一せず、担任がそれぞれ自由に決めることにした。

現職教育主任で3学年担任の真鍋長嗣先生は、その理由を次のように話す。

「活動内容は、担任がそれぞれ、目の前の子どもの実態に合わせて工夫しています。私の学級では、友だちの意見と自分の意見とがどう違うのか、どこが違うのかを判断できない様子が見られました。そこで、テーマが似通った課題文のプリントを二つ用意し、筆者の考えを比べさせています。また、この時間で見えてきた各学級の課題などは、学年会や部会で共有しています。これらによって、教師も一人ひとりが主体的に取り組みやすくなり、他の教師への刺激にもつながります」

6月には、3年、5年、6年の一学級ずつで一斉に国語の研究授業を行った。他者とかかわることを通して主体性を育てようというねらいだが、子どもが二人一組で話し合う学年、4〜5人のグループ内で話し合う学年、教師と子どもとの対話を中心の学年というように、活動の仕方には違いが見られた。

「他学年の授業を見ることで、発達段階に応じて活動内容や形式をどう工夫すればよいか分かります。国語以外の教科に言語活動をどう取り入れるかを考える上で役立ちます。また、他学年の教師からもアドバイスを得られたり、

授業を見た学年の児童に声を掛けやすくなったりするという効果もあります」(真鍋先生)

他者への感謝の気持ちを素直に表現できるように

重点プロジェクトの二つめは、②心の教育だ。他者への思いやりを育もうと、「栗っ子ありがとうの日」を設けた。これは、児童会の子どものための考えを基に、心の教育部会が設定したテーマに沿って、毎日の生活で感じた友だちの良いところや家族のありがたさなどを発表する活動だ。どの学年も、道徳の時間を核とした指導計画の中で月1回行う。5月には、地域の人も参加して行われる運動会の感想文を書いた。感想文は各学年から数点ずつを選んで廊下に掲示し、子どもが友だちの書いた内容を読めるようにした。

道徳主任で1学年担任の佐藤盛子先生は、そのねらいを次のように話す。

「運動会では地域の人と普段よりも身近に接することが出来ます。そうしたかわりを通して自分が多くの人に支えられていることを実感するでしょう。でも、なかなか自分の気持ちを表に出せないのは、照れくささが邪魔をしているからに過ぎません。素直に感謝の気持ちを表わった文章を掲示することで、自分の気持ちを伝えることを恥ずかしく思わない雰囲気をつくらうと考えたのです」

感想文には、「近所のおじいちゃんと一緒に踊ってくれて楽しかった」(1年生)、「大きな音量で流れる音楽は僕たちには楽しいけれど、近所の人にとってはうるさく感じられるはず。それでも温かく見守ってくれることに『ありがとう』と言いたいです」(5年生)など、いずれにも地域に対する感謝が表れていた。

大人との多様な交流を通じて社会を見る目を鍛える

現在、栗林小学校は教師、保護者、地域が一体となって子どもを見取る環境を整えようとしている。例えば、感想文の掲示にも、来校する保護者にも子どもの感想をたくさん読んでもらおうというねらいがある。保護者が子どもの成長を感じる働き掛けを、意識的に行ってきた。

学校に強い関心を寄せる保護者が多いのは、そうした積み重ねの成果と言えるだろう。朝の全校集会を見学してから出勤する父親の姿が見られたり、平日にもかかわらず水泳クラスマツチ(写真)にあふれるほどの参観者が集まったりするほどだ。

保護者会や懇談会などでは、多くの保護者が学校と家庭との役割分担を意識して、発言や提言をするという。

「地域と本校の連携については『こういう取り組みは出来ないだろうか』という意見をいただきます。生活習慣に関しては『家庭で出来る



写真 学年ごとの水泳クラスマッチにはたくさんの保護者が参観に訪れ、「共に力を合わせる仲間に出会えて、子どもは幸福だと思ふ」など、自分の子どもだけでなく子どもの友だちが頑張る姿を見て感動したという声が寄せられた

ことはないか』と協力の提案をいただきます。教師と保護者とが一緒に教育活動を考える伝統が出来ているのです」（三木先生）

同校は、国の特別名勝である栗林公園での始業式や観光ガイドのボランティアなど、地域と連携したさまざまな取り組みも行っている。

「地域の活動は、社会人や高齢者など、保護者以外の大人とのかかわりがおのずと生まれます。そこでの協働的な活動や交流を通して、子どもは地域についての探究活動を深めます。教科学習で身に付けた知識を活用する良い機会に

もなると考えています。大人の賢さや優しさに触れ、憧れの気持ちを持つこともあるからです」（三木先生）

学校運営についても地域の声を取り入れようと、子ども会会長や元PTA会長、体育協会会長などで編成される地域学校連携推進委員会を設けている。10年度から始めた「マラソン期間」は、子どもの体力低下を心配する同委員会の声に応えたものだ。



育てたい大人像と
そのための小学校の役割
公共心を育むため
多くの人とのかかわりを

10年後、20年後、社会に出ていく子どもたちをどのような姿に育てたいかを、先生方に聞いた。
三木先生は、地域を愛する大人になっ
てほしいと話す。
「地域は生活の基盤

となります。今、住んでいる栗林地区のことだけでなく、将来、どこに住むことになっても、近隣の人と力を合わせて、その地域のために尽くそうとしてほしいと思います」

佐藤先生は、自らの課題を一つひとつ乗り越えていける強い意志を持った大人に育ってほしいと話す。

「何ごとにも諦めずに根気よく取り組む気持ちを支えるのは、『やれば出来る』という信念です。自分を信じられなければ、何も始まりま

せん。自尊心があるからこそ、他者への思いやりも生まれるのだと思います」

真鍋先生は、自分の考えを持つことが大切だと話す。

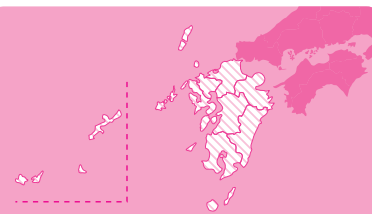
「社会に出れば、さまざまな考え方の人に出会います。他者の意見に耳を傾けることは重要ですが、子どもにはその前にまず、自分はどう考えるかをしっかり固めてほしいと思います。話し合いでも討論でも、根本はそこにあるのではないのでしょうか」

藤本校長は、相手を気遣うことと責任感の育成が大切だと言う。

「人間は自分一人で生きているわけではありません。だからこそ、周りの人に対して気を配ったり、所属する集団の中の義務を果たしたり出来る、いわば公共心を備えた大人に育てたいと思います」

そうした大人を育てるために必要なことを、藤本校長は次のように話す。

「地域の方は率直な意見を寄せてくださいます。授業参観では、『あの場面では、子どもの答えに教師がもう少し反応しても良かったのではないか』といった教科指導の課題も指摘されます。いつも受け入れるわけにはいきませんが、教師の視点に偏らない指導を追究する上で、とてもありがたいことです。私たち教師は、地域の子どもを見る目と声を謙虚に受け止めながら、多くの人とのかかわりを通して子どもたちを育てていきたいと思えます」



学校事例 8

九州 地区

宮崎県 宮崎市立西池小学校

地域とのつながりを深め 心の基盤を 西池に持つ人」を育てる

どんな大人になってほしいか



- ふるさとを愛し、世界のどこにいても、心の基盤をふるさとに持っている人
- たとえ困難にぶつかっても諦めずに努力して、夢を実現しようとする人

そのための小学校の役割



- 子どもが「楽しい」「自分には大切な戻れる場所がある」と感じられる心の拠り所であること。そのために、教師も教育活動を楽しんでいるような学校であること
- 地域に必要とされる学校。そのために、積極的に情報を発信したり、地域とかかわったりすること

未来に残したい 西池小学校の力強さ

- ◎ 子どもにとっても、地域の人にとっても豊かで楽しい生活を送るきっかけの場となろうとしている。そのために、保護者や地域の協力を得ながら、その期待に応えられるように、学校から積極的に働き掛けたり、連携したりする取り組みを数多く続けている
- ◎ 学力向上のために、常に授業改善に努めている



宮崎市立西池小学校
研究主任 馬場義和
Baba Yoshikazu
「学校を取り巻くさまざまな物事、そして人に対して、常に謙虚さを忘れずに接したい」



宮崎市立西池小学校
教務主任 日高康朗
Hidaka Yasunori
「人に頼らず、困難を自力で解決できる人間を育てたい」



宮崎市立西池小学校校長
高山秀典
Takayama Hidenori
「子どもたちが主役であることを常に念頭に置き、楽しい学校をつくりたい」

School Data

設立	1955(昭和30)年
校長	高山秀典先生
児童数	871人
学級数	30学級(うち特別支援学級2)
所在地	〒880-0027 宮崎県宮崎市西池町12-49
TEL	0985-24-2611
URL	http://www.mcnet.ed.jp/nishiike-s/
公開研究会	未定



教育熱心で協力的な 保護者の期待に応えたい

宮崎市立西池小学校は、県立図書館や県立美術館、宮崎公立大などがある宮崎市中心部の文教地区に位置する。大手企業の社宅もあり、教育熱心な保護者が多い。最近では卒業生の約3分の1〜5分の1が地元の公立中学校に進まず、国立・私立中学校、県立中高一貫校に進学した。

保護者や地域の学校に対する期待は高く、非常に協力的だ。例えば、地元にはプールがないため、PTAがプール委員会を組織し、約30人の保護者が運営を補助して夏休みの数日間、同校のプールを開放する。1日当たり平均200人前後もの子どもが集まるといふ。日程終了後、忘れ物はそのままとめて保管されるのが一般的だが、「プール委員長が「そのままでは臭くなってしまう」と、バスタオルや下着などを全て洗濯し、畳んで持ってきた。高山秀典校長は、「私は教師生活37年目になりますが、初めての経験でした。『おらが学校』という気持ちで支えていただいていることを実感しました」と語る。

落ち着いた学習環境にあり、学力的にも安定している同校に赴任した時のことを、研究主任の馬場義和先生は、「指導に専念できると思う半面、保護者の教育に対する意識が高いことにプレッシャーも感じました」と振り返る。教務主任の日高康朗先生も、「更なる学力向上のため

めに、私たちの授業力を常に高める必要性を強く感じました」と続ける。

ICT活用、授業研究、小中連携 学力向上とキャリア教育のあり方を模索

こうした保護者の思いに応えるべく、同校では学力向上のために新たな授業方法の研究や導入にとっても積極的だ。例えば、ICT活用の面では、2010年にモニターや実物投影機が全教室に配備された。教師は子どもの興味・関心を引くための導入部分を中心に活用。30学級のうち、常時半分近くの学級で使っている。11年度にはブログの更新や実物投影機の使い方など、ICT活用の研究会を開いた。

「以前の研究会では、時に厳しい言葉が飛び交うことになって互いの指導力を高めていきましたが、最近の研究会では互いの指導に口を出さないという風潮が強まっていると思います。しかし、本校の授業研究や職員会議では、厳しい意見も出るように工夫しています。互いに切磋琢磨するためには、物言わぬ集団ではだめです」
(高山校長)

11年度には、中学校区での小中一貫教育の推進に取り組み始めた。小学校2校、中学校1校の3校で、「夢と希望をもち主体的に学ぶ児童生徒の育成」学力向上と『自分さがし』の推進を通して」という共同研究テーマを設定。学力向上とキャリア教育を二本柱に研究を進めている。

ただ、それぞれの学校が積み上げてきた伝統もあり、共同での研究はそう簡単には進まない。

「小中一貫教育の良さや大切さは、教師全員が理解しています。しかし、各校には歴史と伝統があり、それぞれが思いを持って、教育活動に取り組んできました。学級担任制の小学校と、教科担任制の中学校とでは、教師の空き時間の取り方や、授業の進め方など、物理的に実現が難しい場合もあります。今後、中学校の教師が小学校の授業に入ったり、中学生が、出身小学校の後輩に体験談を話したりするなどの具体的な活動を通して、教師も子どもも、小中の交流を深めて、互いを理解していきたいと思えます」
(馬場先生)

3校による小中一貫教育の研究は始まったばかりだが、高山校長は少しずつ手応えを感じ始めている。

「子どもたちには単に知識量を増やすだけでなく、それを生かして自分の夢を実現していく力を付けてほしいと思っています。それはまさにキャリア教育そのものです。私たち教師はまだ勉強しなければならぬテーマですが、3校で協力して、9年間かけて力を付けるといふ共通理解が少しずつ深まってきていると思います」

子ども、教師、学校にかかわる誰もが 「楽しい」と思える学校に

先のプール開放の件のように、地域の人々が

同校に寄せるまなざしは温かい。しかし、子どもが地域に愛着を感じたり、地域に見守られている実感を十分に得られたりしているとはいえない状況にある。転勤してきた家庭やマンション居住者が多いことなどが、その理由だ。例えば、近隣の小学校はほぼ全員が子ども会に加入しているが、同校は3割程度。このため、子ども会が集団登校を担うことが出来ないなどの課題が生じている。

集団登校など目先の課題はもちろんのこと、長期的に見ても、学校が基点となり、子どもと地域、保護者と地域とのつながりをもっと深め、地域から必要とされる存在になりたいと、同校は考えている。

「子どもたちは将来、必ずしも地元に残るとは限りません。それどころか日本を飛び出して、世界を舞台に活躍する可能性も大いにあります。そうした子どもにとって、本校が心の拠り所でありたい。『自分には、大好きな戻れる場所がある』と思えるからこそ、困難と向き合った時にくじけず、夢を実現しようとしてひたむきに努力できると思うからです」(高山校長)

子どもが大人になっていつか帰りたいと思いい、地元の人々がもっと豊かで楽しい生活を送るきっかけの場となることで、西池小の地域がもっと活性化し、よい循環が続く。そのために、もっと出来ることがあるのではないかと高山校長は考えている。



写真1 民生委員と一緒に給食を楽しむ。この日は、体育館に集まって地域の話の聞いたり、下校時と一緒に歩いたり、1日かけて交流を楽しんだ(写真は2010年度3年生での交流給食の様子)



写真2 サマースクールで地域ボランティアの講師に書道を習っている様子。一つの講座につき複数の講師が対応するため、きめ細かく指導してもらえる。子どもの参加は任意にもかかわらず、毎年盛況だ

「地域の人たちが、自由に学校に出入り出来るような活動はないかと模索しています。例えば、朝学習で地域の高齢者の方が教えることがあってもよいのではないかと思っています」
日高先生も「子どものためになる活動というのが大前提となりますが、地域の高齢者に生きがいを提供することも、これまで以上に考えていきたいと思っています」と話す。

地域と連携した取り組みで 共に子どもを育む

こうした考えから、地域とのつながりを深めるための開かれた学校づくりを目指してさまざま

まな活動を行ってきた。特徴的な取り組みの一例を紹介する。

◎民生委員との交流給食(5月)

校区の民生委員約30人を学校に招待。1・2年生の教室に4〜5人ずつ入ってもらい、子どもと一緒に給食を食べる(写真1)。民生委員の仕事がどういふものかを、1・2年生にはまだ十分に理解できないが、給食を食べながら話をすることによって、子どもは自分が地域全体で見守られていることを感じる機会となっている。給食費は自費であるにもかかわらず、民生委員の人たちは、毎年、喜んで参加している。

◎校区内の危険箇所点検（7月）

各自治会長と教師と一緒に校区内を歩き、子どもにとって危ない場所を点検し、マップを作っている。自治会を教師全員に振り分け、日程の調整や点検する地域の役割分担など、自治会長との連絡は担当教師が直接行う。

また、教師は、地域の生涯学習担当や文化祭担当など、地域連携の何らかの役割を校務分掌に位置付けられ、出来るだけ地域の行事に参加する。例えば、馬場先生は公民館で開かれる地域の文化祭に2年連続で参加した。

◎サマースクール（8月）

夏休みの2日間、地域の人が講師を務めるパソコン講座や絵手紙講座、宮崎公立大の学生が教える学習講座などを開いた（写真2）。11年は児童約400人が参加した。

「学校を支えたいと思っていても、地域の方にはなかなかその場がありません。サマースクールは、自分の特技を生かしながら、子どもと接するよい機会となっています。書道の講師は80代の方で、『これが生きがいです』と毎年、快く引き受けてくれます」（高山校長）

◎地域ボランティアカード

加入率が低い子ども会の代わりに、子どもが地域の行事に参加して異年齢交流を行う機会として始めたのが、「地域ボランティアカード」だ。地域の行事に参加した際、主催者から専用カードに参加印をもらい、10個貯まると学校から賞状が渡される。行事の前には、担任が子どもた

ちに「今週末にこういう行事があります。参加してみましよう」と伝えることもある。

「地域の行事も子どももの参加率が低いと、今後の運営が危ぶまれます。そこで、学校が地域に協力してもらうだけでなく、学校も地域に協力するという意識の下、『地域ボランティアカード』を取り入れました。互いを活性化させようという意識を持ち、協力することが大切だと感じています」（高山校長）

◎ウェブサイトの充実

地域の人を含め、保護者に学校の様子を積極的にアピールするため、ウェブサイトによる情報発信にも積極的に取り組む。「学年別」「校長室」「給食室」などのブログを設けて、高い頻度で更新し、日々の学校の様子を伝えている。その充実ぶりは、全国的な小学校のホームページコンテストで入賞するほどだ。11年度には、「おすすめレシピー」と「保健室」のブログを新たに加えた。アクセス数は1日平均200に上るといふ。

「一人の担当者だけで運営しようとすると、担当者の異動と共に更新が滞りがちになります。本校では、担当者を一人置いていますが、教職員全員が更新できるようにし、常に誰かが学校の様子を伝えられるような体制としています。本校がどのような学校か、校長がどんな思いを抱いているのかを伝えられればと思い、私でもできるだけ毎日更新するようにしています」（高山校長）



高山校長が念頭に置いていることは、子どもにとっても教師にとっても、学校にかかわる大勢の人たちにとっても楽しい学校にすることだ。

「子どもにとって は、単なる一時的な快楽で楽しいと感じるのではなく、『勉強が分かった』という、本当の楽しさを味わってほしいと思います。その意味で、学力向上は、今後も学校づくりを支える柱となるでしょう。また、子どもが『楽しい』と感じるためには、指導する教職員も『楽しい』と思うことが大切です。『仕事だから』と受け身の姿勢でいては、より良い授業づくりのアイデアも湧かず、忙しい日々で疲れてしまいます。世の中にはいろいろな職業がありますが、私は教師が最高の職業だと思っています。来年、定年を迎えますが、もう一度職業を選べるとしても、また教師を選びます。いかに世の中が変わろうと、人を教えられる仕事は教育者しかありません。先生方には、教師という仕事や自分の立場を誇りに思ってもらいたいと願っています。また、そう感じられるような環境を整備するのが、校長の使命であると考え、これからも努力を続けていきたいと思います」

一斉指導、板書、校内研究 世界から見た日本の教育の強み

世界の国々に比べると、日本の教育はどのような点に特徴があるのか。未来に引き継ぎたい日本の教育の良さ、海外の学校から学べるヒントを、海外の学校への赴任経験をもつ3人の先生に聞いた。

——まず、先生方の海外の学校への赴任経験をお聞かせください。

嶋田 1994年から3年間、香港日本人学校に教諭として、2006年から3年間、バーレーンのバハレーン日本人学校に校長として赴任しました。香港は小学校だけで48学級、小・中合わせて約2200人が在籍する大規模校で、バハレーンは児童数30人程度の小規模校でした。

高橋 79年から82年まで、パリ日本人学校に教諭として赴任しました。帰国後は札幌市の公立小学校校長として勤務しました。定年退職後も海外の教育に関心があり、シニア派遣としてアイルランドのダブリン補習授業校（*）、イギリスのテルフォード補習授業校の校長を各2年間務め、11年3月に帰国しました。

継田 02年からシンガポール日本人学校クレメンティ校に教頭として、09年からは中国の大連

日本人学校に校長として赴きました。

グローバル化の進展に伴い 付加価値を生み出せる力が重要に

——海外経験を踏まえ、これからの社会を生きる日本の子どもには、どのような力が必要だとお考えですか。

嶋田 現地で日本企業の生産拠点がどんどん進出してくる状況を見て、グローバル化の急速な進展を肌で感じました。生産拠点の海外移転と共に技術も国外に流れ、国内産業の空洞化が進むかもしれない。そうすると、単に知識や技術を身に付けただけでは、仕事がなかなか見つからない状況が起こり得ます。日本にとって切実な問題だと思います。バーレーンにいた時、彼らが既に太陽光をビジネスチャンスとして捉えていることに驚きました。既存の豊富な原油を

北海道札幌市立中の島小学校校長

嶋田 肇

しまだ・はじめ◎札幌市公立小学校教諭、香港日本人学校教諭、バハレーン日本人学校校長などを経て、現職。北海道国語教育連盟研究講師、札幌国際理解教育研究会副会長も務める。
札幌市立中の島小学校◎国際社会で信頼と尊敬を得るにふさわしい調和のとれた児童の育成を目指す。児童数は483人。



輸出するだけでなく、常に新たな付加価値を考えているのです。日本がこうした国々に肩を並べて繁栄するには、新学習指導要領で強調されているように、知識や技術を活用する力、思考力・判断力・表現力を育て、付加価値を生み出す力を付けることが不可欠だと感じました。

高橋 同感です。私はそれに加えてもう二つ、必要だと思ふことがあります。一つめは、身に付けた力を実社会や将来と結び付けて考えることです。アイルランドでは、中学生くらいから自分が就きたい仕事の実習に行きます。私のいた補習授業校でも、教員志望の卒業生が、実習をさせてほしいと来て、受け入れたことがあり

*補習授業校とは、現地の学校や国際学校（インターナショナルスクール）に通学している日本人の子どもに対し、土曜日や放課後などを利用して、国内の小学校又は中学校の一部の教科について日本語で授業を行う教育施設（文部科学省『海外で学ぶ日本の子どもたち』（平成21年2月）より）

元北海道札幌市立小学校校長

高橋承造

たかはし・しょうぞう◎札幌市公立小学校教諭 教頭、校長、パ
リ日本人学校教諭、北海道国際理解教育研究協議会会長などを務
める。定年退職後、アイルランド・ダブリン補習授業校、イギリス・
テルフォード補習授業校の校長を務め、11年3月に帰国。



ました。夢や志をもち、「学んだことをこうい
う風に役立てたい、生かしたい」と将来を見据
えて考える力が必要だと思います。

二つめは、自分の文化を誇りに思い、自分の
考えを伝えながら、相手の文化も理解しようと
する姿勢です。赴任国では声の大きい方が勝つ
と感じたことがあります。相手の気持ちと共
に全体を考える、両方が仲良くすることを考え
るのが日本の文化です。まずはこの良さに誇り
をもってほしいと思います。

継田 私の赴任していた頃の中国では、日本と
は異なり、何かを手に入れるために順番に並ぶ
ようなことは難しいと言われていました。異な

る文化の国に入ったなら、その国の文化として相
手を尊重し、その上で自分を認めてもらえるよ
うに発信していく力が必要です。加えて、何か
問題が生じた時には、知識を使って判断して解
決していく力がなければ世界に通用しないだろ
うと思います。

一斉指導や丁寧な板書など 世界に誇れる日本の教育

——お話にあつたような力を育むために、今後
も大切にすべき、日本の教育の良さはどのよ
うなことでしょうか。諸外国の学校教育の特
徴と併せてお聞かせください。

継田 中国の学校は、教え込みが中心です。子
どもは姿勢よく話を聞き、学校と家庭で勉強す
る時間は、日本と比べものにならないくらい長
いです。日本もかつては、知識・技能を一番に
重視して、教え込みの教育を行っていたと思っ
ます。しかし同時に、子どもが待つ時間や黙っ
ている時間を少なくしようと工夫したり、理解
がより深まる具体物を用意したり、子どもが考
えたり表現したりすることも大切にしていまし
た。更に現在、今まで日本がもっていた一斉指
導の良さを生かしながら子どもの発想も生かす
指導、単なる教え込みではなくて、子ども個人
の意欲や個性を大切に教育にうまく転換で
きているのは良い点だと思います。

高橋 赴任国では、日本のように学級全員がき
ちんと自席に座っていることや、教師の一言で

同じ活動をさせる指導は「神業」と思われてい
ます。このような一斉指導の中で多くの先生方
が、問題解決学習を多く展開されていることは
素晴らしいことだと思います。このことに、海
外の教育関係者は驚きを感じています。

嶋田 「一斉指導の時代は終えるべき」のよう
に言われることもあります。そうではないと
思います。香港の日本人学校にいた時に取材を
受け、「子どもたちが一斉に掃除をすることは
信じられない」という内容の報道がなされまし
た。先日の東日本大震災でも、被災地の方の
落ち着いた対応に各国が驚きを隠せませんでした。



北海道札幌市立百合が原小学校校長

継田昌博

つぎた・まさひろ◎札幌市公立小学校教諭 シンガポール日本人
学校クレメンティ校教頭、札幌市公立小学校校長、中国・大連日
本人小学校校長などを経て、現職。北海道小学校理科研究会会長、
札幌国際理解教育研究会副会長も務める。

札幌市立百合が原小学校◎教育目標は「豊かな心で地球とともに
伸びやかに生きる百合が原の子どもの育成。児童数は711人。

た。一つの指示で混乱なく行動できることは、これまでの教育と無関係ではないと思います。

継田 海外ではよく、子どもは勉強が仕事で、掃除は仕事ではないと言われます。しかし、日本の学校では、集団生活の仕方、ルールや我慢の仕方でも学びます。このような取り組みは日本の学校教育の良さなのでしょうね。

高橋 指導案も誇れる点です。私を知る限り、海外では指導内容を確認する程度で、日本のような指導案を作ることはありません。授業の流れを想定し、子どもの反応を予想し、それに対



して、どう発問を投げ掛けるのか、どのような道筋で授業の目標を達成するかというシナリオをきめ細かく準備するのは、日本の教育で誇れる良い伝統だと思います。

継田 当時のシンガポールでは、コンピュータに学習内容がプログラムされていて、その通りに授業を進めました。子どもの予想外の発言を生かして学習を広げるような指導は、日本のように授業の目標の中心を押さえて、子どもの反応やそれに対する教師の発問を事前に考えておかなければ出来ません。

板書の完成度の高さも、日本の学校教育の特長でしょう。中国やシンガポールではコンピュータのデイスプレーを使い、板書はほとんどしませんし、アメリカの小学校も視察しましたが、板書は重視されていませんでした。授業の流れが一目で分かり、色チョークなどを駆使して、一人ひとりの子どもの考えを黒板に位置付けていく技術、相反する意見も位置付けて新しいところへまとめていく技術は、素晴らしいと思います。子どもは板書を見てその時間に学んだことを振り返れますし、友だちが何を考えていたのかも分かります。自分の考えが尊重された、授業に参加できたという自信や意欲にもつながります。

同僚性が高く 組織的に対応できる日本の学校

——日本の学校の組織面では、海外と比較する

とどのような特徴や良さがあるのでしょうか。
高橋 これほど校内研究に力を入れているのは、おそらく日本だけでしょう。教師が互いに授業を見せ合い切磋琢磨している素晴らしいので、海外経験を通して改めて感じました。

嶋田 学校全体だけでなく、学年団や教科ごとなど、さまざまなレベルで指導法や教材を研究し、それを研究発表までするのは日本ならではです。教師の指導力向上に大変役立っていると思います。

高橋 海外では、他の教師に授業を見せることは基本的にありません。フランス人の教師に保護者参観について話したら、「どうして保護者に授業を見せる必要があるのか」と驚かれたことがありました。彼らが授業を見せるのは視学官の査定を受ける時だけです。よし悪しはともかく、それくらい授業の内容は個々の教師に任されているのです。

嶋田 バレーンの現地校では、教師は1年契約で担任を任せられ、職員室すらありませんでした。査定は給与に影響するので、教師は業績を上げることに必死です。教師として、子どもたちに「分かった」「出来た」といった喜びをもたせたい思いはありますが、個々に授業改善に取り組んでいますから、教師間の同僚性はほとんどなく、学校経営という発想もありません。教材研究や教材・教具作り、生活指導など、あらゆる面で組織的に取り組めるのは、日本の学校の大きな強みです。

言語活動の充実を図りながら 異文化を尊重し合える価値観を

——日本の良さを生かしながら、日本の教育を更に充実させるために大切だと思う視点をお聞かせください。

嶋田 まず、思考力、判断力、表現力を付けるために言語活動を更に充実させることだと思えます。これらの力が付く授業が出来ているか、子どもが今まで培ったことを使える機会となっているか、意識する必要があります。

継田 海外の学校へ出て感じたのは、子どもが自分の意見をはっきり言えるということ。これは30代後半に自分の学級で帰国児童を受けもった時にも感じたことで、海外の教育に関心をもつきっかけになりました。日本でも、言語活動を通じて、低学年から自分の思いや考えを伝えられるようにする必要があります。

高橋 評価も大切です。赴任国では、知識だけでなく考えも書かせたり、集団で議論をさせたりして力を測ります。自分がどう考えたのか、行動まで出来たのかというところまで評価の対象になります。テストの仕方や内容が変われば、授業もより変わっていくでしょう。

一方で、教えなければならぬ部分と、子どもに十分考えさせて思考力を育てていく部分とでめりはりをつけることも必要です。赴任国でも、低学年のうちは、基礎・基本を徹底して教えていました。

継田 習熟度別や少人数の指導も大切ではないでしょうか。習熟度別は差別になるのではないかと、という声を聞くこともあります。しかし、海外ではそういう発想はなく、保護者は喜びます。理解が十分でないなら、学習し直すために、小学校でも留年させることがあります。それが機会均等という考え方です。子どもの理解に合わせて進んでいくこと、それによって一人ひとりが出来たという喜びを感じられることが、本当にその子の力を付けることになるのではないのでしょうか。

嶋田 海外の日本人学校の運営費は、文部科学省、児童の保護者（授業料）、日本企業（日本人会）が3分の1ずつ負担しています。特色のある、魅力のある学校でなければ、子どもは別の学校を選択してしまうため、運営が出来ません。「ぜひ選択してください」とアピールした上でお金を預かるのですから、成果を出さなければなりません。学校の教職員全員が、常に必死ではない。お金をかけるからには、それに見合う取り組みにする必要がある。「例年通り」ということは、日本人学校ではあり得ませんでした。費用対効果や特色を意識した学校づくりの感覚は、この経験を通じて身に付けました。

継田 札幌市では「札幌らしさ」を出そうという方針で、各校が「雪」「環境」「読書」を大事にする教育活動に取り組んでいます。例えば、本校は屋上にソーラーパネルが設置されているので、子どもに札幌の自然を大事にしようとい

う気持ちを育もうとしています。日本でも、ふるさとを大切にしながら学校や地域の特色から何が出来るかを考えることで、特色のある、魅力のある学校づくりに取り組めると思っています。

高橋 補習授業校の子どもたちは、平日は慣れない外国語を話し、友だちとの会話が十分でない中で過ごします。このため、日本語が話せ、友だちもたくさんいる補習授業校は、彼らにとって大好きな場所であり、皆、とても意欲的でした。週1回ですから、指導内容は本当に子どものためになることに絞ります。保護者も、日本に帰国後、子どもが困らないようにしたいという強い願いをもっているのです。学校経営に大変協力的で、学校・保護者・地域が一体となって「子どものために」学校づくりをしています。教育の原点に立ち返った経験でした。

嶋田 日本人学校の子どもは多くは、最初は泣いて現地へ来ます。「日本を離れたくなかった」と。しかし、帰る時は「もっといたい」と言うのです。それは、異文化、異質なものに対して、排除することがなく、どの子どもも自然体で過ごせる体験をするからです。日本人学校では、いじめは全くありませんでした。

継田 海外の学校の良さはそこですね。自分と違う文化や考えを認めてくれるのです。日本にも、さまざまな価値観をもった子どもが、今後は増えてくると思います。その子たちを生かして、互いに尊重し合える価値観を育んでいけるとよいと思います。

新たな時代がすぐそこに 三つの基盤を維持しつつ 教師の思いを込めて授業に工夫を

日本女子大教職教育開発センター所長・人間社会学部教授 **吉崎静夫**

1872（明治5）年の学制発布から今日まで、日本の義務教育を支え続ける小学校。今後、グローバル化が進み、異なる文化や価値観を持つ人たちと共生する必要性が高まる中、これからの小学校に求められるあり方や授業づくりの工夫について、日本女子大の吉崎静夫先生にお話をうかがった。

世界に誇れる 日本の教師の指導力

日本の教育は、世界的に見て非常に高い学力を育んできました。なぜそれが可能なのかを欧米の研究者が注目してきたほどです。私は、その答えは次の三つの要素にあると考えます。

① 始業・終業のあいさつをしっかり行う、私語を慎むといった「授業の成立に必要な学習規律指導」

② 基本的な生活習慣や毎日一定時間机に向かう

などの「家庭での学習・生活習慣を促す指導」
③ 教師が互いに学び合って授業力を高める「教師の力量形成を促す機会」

先生方は、この三つの要素を基盤に、子どもたちと一日中、一年中向き合い、授業実践と研究と工夫を重ねてきました。日本が世界に誇るべき義務教育の特長です。

更に多様な人々とつながらないと 生きていけない時代が到来

学校は、子どもたちが社会で生きていく力を

育む場です。そして今、その社会は大きく変わっています。世界を席卷する国際化の波が容赦なく日本にも押し寄せています。経済的に見ても、景気の低迷や少子高齢化によって消費の伸びが期待できない日本国内よりも、むしろ需要拡大が著しいアジア諸国を市場として重視する企業が増えています。外国での事業機会を獲得するべく、国内外で外国人を積極的に採用するようになってきているのです。国内においても、外国人と競争して会社に就職することも身近になるでしょう。

一つの会社に各国の人が働き、世界を相手に仕事をするようになれば、コミュニケーションのあり方が変わります。英語を公用語にする国内企業が既に現れています。言葉だけの問題ではありません。異なる文化や価値観を持つ人たちといかに良好な人間関係を築くかが問われます。どのような職場であっても一人で仕事は出来ないからです。

更に、これからは、各自が得た知識やノウハウを個人で蓄積するのではなく、皆が情報を共有し、互いに影響し合うことにますます価値が置かれる社会になると思います。ソーシャルネットワークサービス（SNS）やクラウドコンピューティングといった言葉を耳にしたことがあると思いますが、これらはその一形態と言えるでしょう。

たとえ国内にいても、日本人は日本人同士だけでなく、自分とは文化的背景の違う人たちと

もつながらなければ生活できない時代が到来するということなのです。

「かわり」「活用」の必要性を 日常に引き付け実感させる

このように社会が変わる中、小学校教育で身に付けさせたい力は二つあると考えています。

一つめは、「かわる力」です。多くの人が情報を持ち寄り、話し合っこそ、良いアイデアが生まれます。将来、文化的に異なる社会で育った人たちと共に働いたり、競い合ったりする機会が増えれば、自分と違う個性や考え方を柔軟に受け入れ、交流を深めることが必要です。



よしぎき・しずお 1950年茨城県生まれ。大阪大助手、鳴門教育大助教授を経て現職。学術博士。専門は教育工学で、特に学力向上を目指した授業づくりに詳しい。「授業づくり」では、学生に教えるだけでなく、全国の学校現場や教育委員会を多数訪れて指導に当たっている。著書は『デザイナーとしての教師 アクターとしての教師』（金子書房）、『事例から学ぶ 活用型学力が育つ授業デザイン』（ぎょうせい）ほか多数。

二つめは、「活用する力」です。かわりの輪が広がり、人間関係が多様になれば、直面する課題や問題も複雑になります。対応するには、自分と他者の知識や情報を、状況に応じて組み合わせて活用する力が不可欠です。

この二つは、経済開発協力機構（OECD）も今後の社会生活に重要な力として挙げており、世界中で育成しようとしていることがうかがえます。ところがこうした力は、一朝一夕には定着しません。だからこそ、社会に出るまでに時間がある小学校から育むことが重要なのです。新学習指導要領が知識の「習得」と共に「活用」を重視しているのは、そのためです。

社会で必要とされる力が変わりつつあるからこそ、その基礎を担う小学校の役割はますます大きくなっています。

実際の授業づくりを考える上では、他者とかかわり、知識を活用する力を付けるよう、授業を工夫していただきたいと思います。こうした力がいかに大切かを、先生方が「教える」だけでなく、子どもの日常に引き付けて「実感させる」ことがポイントです。

場合によっては、教師以外の立場にある人の方が、子どもへの説得力が強まることもあるでしょう。例えば海外で活躍する人に、仕事で普段どのようなコミュニケーションを行っているかを話してもらえば、子どもたちは目の前の学習が自分の将来に役立つと実感する良い機会になるはずです。

「かわり」や「活用」の必要性を体感させる活動には、子どもの好奇心や探究心に応えられるだけの準備や知識が求められます。先生方だけで行うには負担が大きすぎる場合は、視点を外へ変えて外部人材を探してみたり、ICTを取り入れたりすることも、今後はもっと本格的に考えてみてはいかがでしょうか。

こうした「かわる力」「活用する力」を身に付けさせる授業をつくるために、誰に何をしようか、外部から力を借りるにはどのような手立てが考えられるか。先生方には今後、その企画を立てて実現にこぎ着ける、いわば授業をプロデュースする力が必要になってきます。

外部人材やICTを活用した 授業づくりに取り組む小学校の例

新しい時代に必要な力を意識した授業づくりを始めている小学校は、たくさんあります。例えば、茨城県つくば市のある小学校は県立自然博物館の協力を得て、4年生の理科「季節と生きもの」の単元で次のような活動をしています。

まず、教室と博物館の学芸員の研究室それぞれに大型モニターを設置し、双方を特殊な携帯電話でつなぎます。いわば、携帯電話によるテレビ会議が出来る環境を整えるのです。

そして、子どもを5〜6人のグループに分けます。グループごとに、身近に生えていながら名前を知らない植物をデジタルカメラで撮影し、画像を学芸員に送信し、その植物の名前を尋ねます。学芸員は、すぐには答えを言いません。子どもにも葉の枚数、色や形といった特徴を説明させた上で正解を伝え、更に、似た特徴を持つ別の植物を挙げます。子どもは友だちと話し合いながら、教えてもらった植物を同校内にある植物園で探してその画像を撮影・送信し、気付いた特徴を改めて学芸員に説明します。これを繰り返すのです。

この活動において、子どもは学芸員との会話を通して新しいことを知るだけでなく、皆で協力して得た情報を整理し伝えることで、これまでの知識を活用して言葉で説明する力を身に付けています。外部の人材やICTを上手に取り

入れつつ、他者とのかわりや知識の活用の大切さを、子どもが身をもって感じる工夫を凝らした授業の好例です。

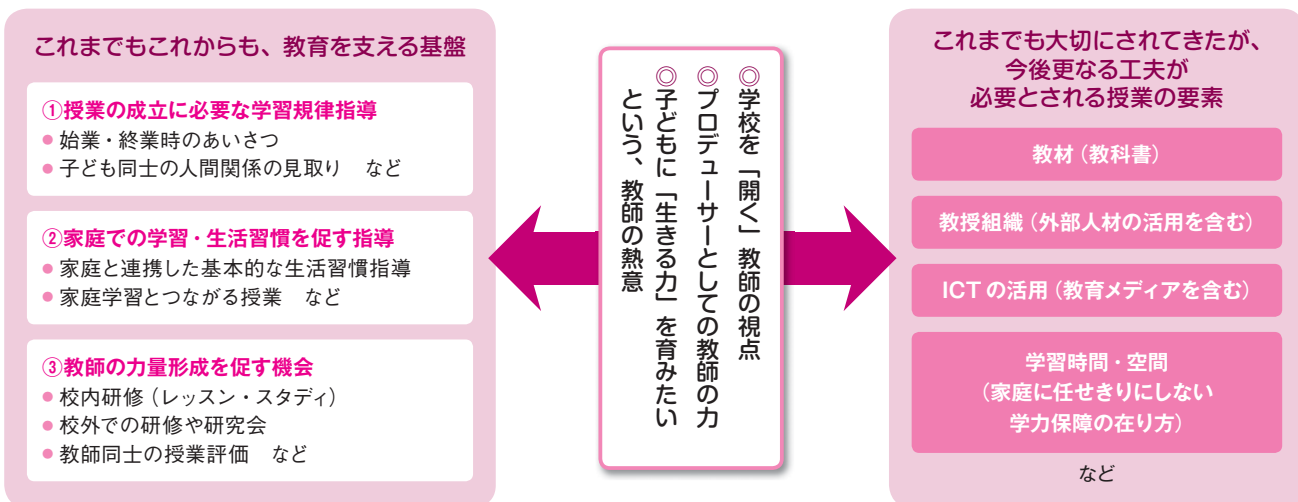
新たな授業づくりは 従来の基盤の上に築かれる

授業づくりの基本は、これまで日本が大切にしてきた基盤、つまり「授業の成立に必要な学習規律指導」、「家庭での学習・生活習慣を促す指導」、「教師の力量形成を促す機会」の三つを守り続けることです(図)。

ただし、今後の社会を生きる上で求められる「かわる力」「活用する力」を育むために、「子どもたちに必要な力を付けさせたい」「そのためにもっと良い授業をしたい」という先生方の思いや、そこから生まれる新たな工夫を、従来の指導に少しでも加えていただきたいと思えます。良い授業をつくるためにまず大切なのは、先生方一人ひとりの「思い」です。目の前の子どもたちが大きくなった時の社会で何が求められているのかを考えてみる。「○○の力を身に付けてほしい」という思いを込めて、普段の授業をちょっとだけ工夫する。このように日々の指導に取り組めば、おのずと教材や指導法に変化が生まれ、将来を生きる子どもたちに必要な力を付ける授業を実現できると思います。

私が気掛かりなのは、基盤の一つである教師の力量形成の機会をどう担保していくかです。教師の年齢が50歳代と20歳代とに二分される学

図 日本の小学校教育における授業づくり



校が見られるようになりました。見習うべき先輩が身近にいないために授業力を付ける上で重要な校内研修がうまく機能しなかったり、教師間の世代のギャップが大きいために教師同士が学び合う集団になりにくかったりといった課題が表れています。少子化によって小規模校が増えていることも、この傾向に拍車を掛けています。つまり、そう遠くない将来、これまでの基盤が揺らぎかねない深刻な状況になります。

子どもの学力も心配されます。授業以外での学習を家庭に任せる学校が増え、家庭間の教育に対する意識や経済的条件などの違いによって、学力差が広がっています。もし教師の授業力が下がり、家庭学習と関連付けた授業が出来なくなれば、更に差が生まれてしまいます。

この二つの課題の解決にも、工夫して企画し学校を開く、先生方のプロデューサーとしての役割が重要です。校内だけでは力量形成が難しくても、近隣の小学校との共同研修や中学校との共同授業研究など、他校とのさまざまな連携があり得ます。学力面では、学校や教育委員会がアルバイトを雇ったり、ボランティアに頼むなど、定期的に補習を行うことも一案です。

先生方の足並みをそろえ、学校の進む方向を定めるには、管理職の先生方の力が欠かせません。社会が大きく変わる、時代の転換期だからこそ、校長先生にはこれまで以上に、先を見通す力とリーダーシップでご指導に当たっていただきたいと思えます。

未来の先生に聞く「私が大切にしたいこと」—吉崎先生の記事を読んで—

授業の基盤を大切にしながら 多様な交流が生まれる学級をつくりたい

明星大教育学部4年

澤崎美智子さん



吉崎先生のお話を読み、「かかわる力」と「活用する力」の重要性がよく分かりました。教師の卵として、子どもが知識を得るだけでなく、得た知識を組み合わせる活動を取り入れていきたいと思えます。私が実際に取り組む立場になったら、次の二つを大切にしたいと考えています。

一つめは、多様な交流です。友だち同士だけでなく、例えば地域に住む保護者以外の大人ともかかわることで、子どもはさまざまな考え方に触れるでしょう。自分と年齢の離れた人とどうしたらうまくコミュニケーションがとれるかを探るうちに、おのずと視野が広がると思えます。

二つめは、どの子どもも自由に意見を交換できる学級づくりです。一人ひとりが互いを思いやる気持ちを持てるよう指導し、教室を、恥ずかしがらずに自分の考えを述べられる空間にしていきたいと考えています。友だちとの話し合いを通して、自分の意見を鍛えてほしいからです。

この二つは、何も無いところからは生まれません。学習規律や生活習慣、先輩の先生方に教わる姿勢といった授業の基盤があってこそ実現できると思えます。日本の小学校教育の特長を守りながら、工夫を重ねていきたいです。

外国語活動と言語活動を工夫し 「かかわる力」と「活用する力」を育みたい

日本女子大人間社会学部4年

湯山千怜^{ちさと}さん



吉崎先生がおっしゃる「今後の社会で身に付けさせたい力」と2011年度から全面实施された新学習指導要領との関係を考えてみました。私は、外国語活動と言語活動に特に注目しています。

外国語活動は、異なる文化や価値観に触れる良い機会となります。教師自身が外国語に親しむ姿勢を持ち、ALTとの連携を図ることで、子どもの「かかわる力」を育てる授業をつくっていききたいです。

言語活動では、新しい情報から自分の考えを深めて言葉で表現する活動こそ、「活用する力」を育成する鍵になると思います。実際に指導する立場になったら、日々の授業の中で教師と子どもとの対話はもちろん、子ども同士が意見を交換する機会も増やしたいと考えています。そうすれば、子どもの「かかわる力」を伸ばすことにもつながるのではないのでしょうか。

私は教師を目指す者として、いずれの活動でも子ども一人ひとりを丁寧に見取っていききたいと思えます。授業場面でも生活場面でも、子どもが居場所を感じられる環境をつくることによって、学習意欲につながっていくと考えています。

2011 Vol.2特集「思考が深まる『学び合い』」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*「VIEW21」小学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト (<http://benesse.jp/berd/>) でご覧いただけます。

◎私も「自力解決と学び合いを取り入れた、楽しく分かる問題解決的な授業」を目指していますが、学び合いはなかなか深まらないのが実情です。今回の特集は、学び合いをつくる手立てについて授業を再現しながら具体的に紹介しており、大変分かりやすかったです。普段の授業に取り入れながら、一人ひとりの考えを練り上げられるような学び合いを、少しずつつくっていきそうだと感じました。 [群馬県/A小学校/S・M]

◎35年ほど前、新任の教師として悪戦苦闘していた私に、先輩教師が「満足できる授業なんて1年間にそんなに多くないよ」とアドバイスしてくれました。その日から授業の中身を少しでも高めようと努力を重ねてきました。文教大の嶋野道弘教授と掛川市立城北小学校の鈴木功一校長の「課題整理と実践のヒント」は、教師も共に育つことが出来る内容であり、若手教師に授業力の向上に励んでほしいと思い、回覧しました。

[大阪府/M小学校/M・H]

◎「課題整理と実践のヒント」で取り上げられていた「かもつれっしゃ」の授業が面白く、「なるほど!」と納得しながら読みました。「詩」は「形式ではなく、情景が思い浮かぶものかどうか」を考えるきっかけとなった、児童の何気ない言葉を取り上げたことが素晴らしいと思いました。 [栃木県/K小学校/T・H]

◎子どもが「学びたい」「解決したい」と思える課題の設定がとても大切だと思いました。教師には、日頃の授

業で子どもの素直な疑問(つぶやき)を取り上げる心のゆとり、感性が求められます。掛川市立城北小学校の「『自まん』づくり」は、学校を挙げて取り組み始めば子どもが変わると思いました。本校でも取り入れてみたいです。 [和歌山県/N小学校/Y・Y]

◎掛川市立城北小学校の「6年生算数の授業に見る学び合いの流れとポイント」では、同じ流れの指導案で行われた二つの授業を並べていましたが、指導案が同じでも、学級、児童の構成、個性、特徴、教師の持ち味などで、全く異なる授業展開になっていた点が興味深かったです。教師の投げ掛けなどを比較しながら見ていくと、変容につながるポイントが見えてくるようで、楽しく読みました。 [栃木県/N小学校/Y・A]

◎大田区立久原くがはら小学校の事例にある「ポイントを絞った指導で、学び合いの時間を捻出」が、勉強になりました。教科書にある資料は全て提示しなければならないという意識がありましたが、「学習指導要領でポイントを確認し、教科書にある資料でも取り上げないこともあります」というコメントに、そうではないことに改めて気付かされ、指導内容のポイントを把握する重要性を学びました。 [山梨県/K小学校/K・K]

◎「学び合い」を活性化させるための五つのポイントを実践している大田区立久原小学校は素晴らしいと思います。極小規模複式学級の本校の研修にも、大変参考になります。 [鹿児島県/S小学校/K・T]

お知らせ

文部科学省が被災地の学校と提供者を結ぶマッチングサイトを開設しています

「東日本大震災 子どもの学び支援ポータルサイト」<http://manabishien.mext.go.jp/>

編集後記

これまでにかがった全ての学校で、子どもと笑顔で接する、子どものために授業づくりに力を尽くす先生方の姿、言葉に胸を打たれ、元気をいただけてきました。今回かがった釜石市では、学校を再開し、教育活動を行い続ける姿勢に、強い信念、覚悟を教えてくださいました。今日までご指導いただいた先生方へ、心より御礼申し上げます。これからも、各地の先生方のパワーを、思いを、熱を、少しでも多くお届けできるよう、力を尽くします。日本の未来は、教育が、小学校がつくと信じています(青木)

VIEW21 小学版 2011 Vol.3

2011年11月11日発行/通巻第30号

発行人 新井健一
 編集人 原茂
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション
 Benesse教育研究開発センター
 (株)ビーヴィオコーポレーション
 (有)ペンタコ
 印刷製本 二宮良太、山口慎治
 編集協力 石田理恵、川上一生、八木直人、
 執筆協力 ヤマグチイッキ
 撮影協力 浅沼リカ、幸剛
 イラスト協力

◎お問い合わせ先

VIEW21編集部
 電話 03-5320-1287
 〒163-0411東京都新宿区西新宿2-1-1
 新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2011